

第 14 卷

森 新

SEIJU

1990 春号



横浜 善光寺刊

拜啓 早春の候愈々而清祥の候
おまりのび申すはます

成書「茅草」をとお送る致し申す
今回は私の最初の海外旅行の地あり
又留学増派遺 最初の地にもなる
タイと特集としましたのぞらんと
だけましから幸甚にあらば
今後次第に好め申すに申すは
何卒お師にはお礼と付けらるる
たくまは御挨拶また申すは
挨拶をいし申す

今春

武蔵二年三月

王宮光寺住持 黒田大園

(武志)

各 位

刀つる
杖き

すべてのひとは

幸福たのしみをこのむ

されば

おのれ自らの

たのしみを求むる人

他人ひとを害そこなうことなくば

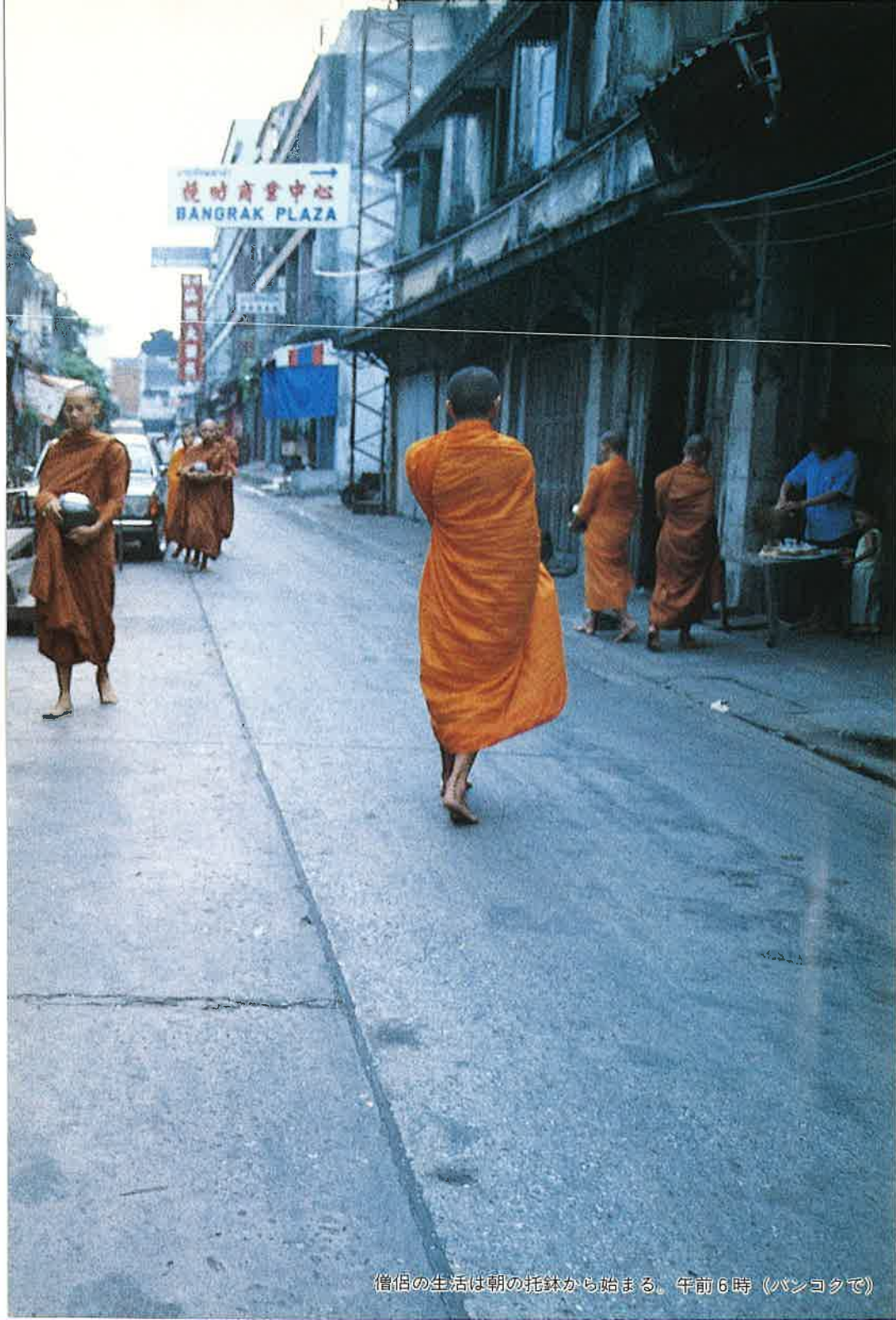
後世のちにたのしみをえん

法句経より



じん みよう たい ぶつ こく ど
甚妙泰佛国土を歩く

撮影／駒澤 晃(写真家)



僧侶の生活は朝の托鉢から始まる。午前6時（バンコクで）



ワット・チェット・ヨードの壁像。聖観世音菩薩坐像（チェンマイ）







午前11時、昼食のため食堂に向かう僧侶（ワット・パクナム）





住職に食事の施しをする信者

食後の経を唱える少年僧





ワット・ハクナム本堂前で施しを受ける波井修師
(善光寺留学僧)



北部の山岳民族、メオ族の母と子。(チェンマイ)



ワット・チェット・ヨードの壁像。聖観世音菩薩立像（チェンマイ）



ロイ・カトーン (スコタイ)
(精霊まつり)



カトーンを作る女性



水牛のいるのどかな農村風景





ワット・ポーの寢釈迦の足の裏。真珠母貝で須弥山図・神々などが描かれている。

カラー	■甚妙泰佛国土を歩く		
巻頭言	●よりよい結実のよろこびを迎う	黒田	武志 22
特集	●ロイ・カトーンの祭り	佐藤	俊明 26
	●タイ国ワットパクナム訪問記	形山	俊彦 48
	●タイ仏教の厚い信仰に悠久の時の流れを感じて	駒沢	晃 71
カラー	●タイふれ合いの旅		77
連載	●くらしの中で読む「正法眼蔵」	小倉	玄照 81
留学記	●水の都スリナガル	阿部	慈園 89
	●はじめてのインド国内旅行	島	岩 93
	●シク教の祈り	保坂	俊司 102
	●学生寮での生活あれこれ	清水	晶子 106
	●オックスフォードだより	引田	弘道 109
	善光寺だより		121
	読者からのお便り		128

題字・グラビア・さし絵
写真
カット

伊藤三喜庵
駒沢 晃
古刷仏集より

ちよらよい結実のよろこびを迎う

「宗祖を通して釈尊に還る」ことを念願とし、両大本山での修行に続いてインド仏蹟を巡拝し、タイ国ワット・パクナムに錫を留めて安居生活に入ったのは昭和四十年、ちょうど四半世紀前のことでした。

ワット・パクナムは、私が世界に眼を開く仏教徒として成長する原点であり、心のふるさとでもあります。そしてまた、海外留学僧受け入れの原点でもあります。六年前、留学僧一名がここに留学することによって善光寺海外留学僧派遣育英会は活動の第一歩を踏み出したのであります。

それだけに私はこれまで幾度か参詣して報恩の微衷を捧げてまいりましたが、昨年の参詣はまた意義深いものでした。

昨年十一月、中村元先生の主宰する東方学院で、「タイ宗教文化の旅」を企画されましたので、そのツアーに参加しました。当然のことながらバンコック市内有名寺院の観光が日程にありましたが、表面的な観光よ

りはと考え、ワット・パクナムを訪れ、食事の供養をおこない、そこで昼食をいただいてはと提案し、賛同を得て実施して双方によるごばれ、感謝されました。これは、南方仏教に対する理解と友好親善にやさかなりと寄与し得たのではないか、また留学僧派遣の意義についてその一端を知っていただいたのではないかと思っております。

ワット・パクナムには日系のプラ・パーワナコーソントーラ副住職あり、また、タイ国日本仏教奉賛会会長に昵懇の小谷亀太郎氏あり、日タイ親善をはかる好機にありますので、この際微力を捧げたいと思っております。目下タイ国日本人会、日タイ友好協会がアユタヤの地に、山田長政はじめ当時の居留日本人の足跡を顕彰すべく記念館の建設を進めております。山田長政の建墓についてはたらきかけたい所存であります。

「念ずれば花開く」といわれます。二十五年前の念願がいまようやく開花の時期を迎えました。さらに美しい花を結ばせ、よりよい結実のよろこびを迎うべく、一層精進いたしますので、何卒よろしく、御協力のほどお願い致します。



歡喜のうた

——方丈様は、青年時代タイ国の
ワットパクナムで得度修行された——

赤間義徳

メナム河のほとりに建つ

ワットパクナムは暁闇に包まれていた。

方丈様は

毎日積み重ねた瞑想の底から

一行の言葉が立ち昇るのを観た。

“およそ戒律のない宗教があるのか”

戒律を

日常に生きた言葉でどう説けばいいのか。

ゼロから出発して二十年。



二千五百軒の檀信徒に
方丈様は 説く。

「お釈迦さまとの約束ごとを守ろう。
そのためには
がまんをすることだ」

方丈様のお言葉は
「がまんを貫き通して

喜びへ」

ベートーベンの言葉と共鳴する。

第九シンフォニー

世界のひとびとが手をつなぐ

歡喜の合唱うたの核心を

方丈様の信念が貫いて

二十一世紀の世界へ

高らかに響いていく。

ロイ・カトーンの祭り

タイ国にみる供養のすがた

善光寺海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職

佐藤 俊明

ハプニング

何年ぶりかで降り立ったドンムアン空港は、
昔日の面影を全くとどめない、素晴らしい大空
港に生まれ変わっており、二十三時というのに
大勢の乗降客でにぎわっていた。日本の空港は
すべてひっそり閑としているであろうこの時刻
のこの雑踏に、この国の強烈なエネルギーが感
じられた。

タイとわが国との時差は二時間なので、日本
では夜中の一時。思えば一昨年カルカッタに到
着したのもこの時刻だった。しかしバンコック
は、あの乾いたモヤのようなものにすっぽり包
まれた不透明なぼやけた夜景ではなく、空気は
澄んでいたし、「マナー」「マナー」と手を差し
のべる子供の姿も見えないのでホッとしたが、
タイのガイドもインドと同じようにいう。「盗難
に注意してください」と。

「トリーナン・アジアだもの、仕方ないサ」と、人ごとのように聞いていたが、この傍観者的な態度に灸をすえられるようなハプニングが起きた。

ホテルに着いて部屋もきまり、ドアのノックに、ボーイがトランクを持って来たのかと思つたら、「ニモツ・アリマセン」という。添乗員のルーム・ナンバーも聞き漏らしているし、言葉も通じない、おまけに真夜中、さて困つた、これは隣室の黒田師をわずらわす以外に手はないと思ひ、早速ノックして事情を述べると、即行動を開始してくれた。

不安の中でいろいろな思いが去来する。十年前、仏像奉迎のためツアーを組んでワット・パクナムにやって来たとき(後述)、団員の一人の荷物が空港におろされず、終点のロンドンまで持つてゆかれ、旅行が終わつて帰国の日に空港で受け取つたことがあつたし、また、それより

二年前ワット・パクナムに持つて来た『南伝大藏経』がスリランカまで持つてゆかれたこともあつた。しかし今回の場合は空港で確かにバスに積み込んだのだから身辺にあることは間違いない。しかし、盗難に遭わないという保証はない。

黒田師がフロント、添乗員、現地のガイドに折衝した結果、トランクはホテルには持ち込まれてないし、どうもバスの腹の中に入つてらしいことがわかつた。しかし、白色の一番目立つトランクがよりもよつて置き忘れられるとは、これまた解せないところだつた。やはり盗難に遭つたのかなアと案じながらシャワーを浴びてベッドに入った。

二時半、電話のベルがなつた。「センセイ・ニモツ、アリマシタ。モツテユキマス」
こうしてようやくトランクと対面することゝできた。やはりバスの腹の中にあつたそうで、と

んだ旅の幕開けとなった。

ツアーの目的

さきにガンジス河の灯明供養を描かれた日展審査員の石川響先生は、また、房州、誕生寺前の海での灯籠流しを描き、「流灯」と題して誕生寺に納められた。

今回のツアーは、スコタイの「キャンドル・フェステバル」をぜひ観たい、観ようではないかという、火と水と花の織り成す静かなる演技に魅せられた石川先生の絵心から生まれたものである。

キャンドル・フェステバル。タイ語でいえば「ロイ・カトーン」。ロイは浮かぶ、カトーンは丸い台を蓮華に型取り、上に線香やローソクをとしたもの。水に浮かべ、水に流す花灯のことであり、日本流にいえば「灯籠流し」である。

ロイ・カトーンは十一月の満月の夜、タイ国

全土でおこなわれているが、発祥の地スコタイのそれは特に美しく素晴らしい。タイを代表するこのスコタイのロイ・カトーンを観ることをメインに、バンコック、チェンマイ、そしてその中間にある有名寺院を参観することがこのツアーの目的で、名付けて「東方学院 タイ宗教文化の旅」（平成元年十一月八日～十五日）という。

あいにく中村元先生にはご参加がいただけなかったが、代わって学院総務の阿部慈園先生が終始、細部にわたって解説指導してくれたもので、総勢二十名、いずれも熱心な仏教研究者であり、日頃絵筆に親しんでいる人の集まりだった。

ワット・パクナムで供養修設

三、四時間のまどろみののち、七時ロビーに集まる。



タイのあいさつは、合掌してほほえみ、「サワデー」という耳にさわやかな響きを残す言葉である。美人から「サワッテイ」といわれたと云ってよろこぶ日本人もいるとか。さわやかなあいさつをかわす。

朝食後、一行とは別に、黒田師、駒澤氏と共にワット・パクナムに先行する。

せっかくバンコックの寺院を観光するのだから、日本と親しい間柄にあるワット・パクナムを訪れ、坊さんがたに食事を供養し、そこで昼食をいただくのではないか、という黒田師の提案と配慮によって、ワット・パクナム詣となったので、万遺漏なきよう事前の連絡のための先行であった。

交通渋滞のタクシーの中で、私はワット・パクナムとの出会いを反芻してみた。

昭和五十一年夏、『仏教タイムス』の主催で曹洞宗大本山総持寺の海外布教に関する座談会が

開かれた。当時私は総持寺の出版部長であり、布教師会事務局長を兼ねていたので出席要請を受け、この席ではじめて黒田師と出会った。席上、黒田師は、かつてワット・パクナムに安居した経験をふまえて、南方上座部仏教との交流を提唱され、師の提唱がみのつて翌年五十二年一月、総持寺では有史以来はじめての試みとして三人の雲水をワット・パクナムに送った。これは大乘仏教と上座部仏教の相互理解のために、またあとに続く留学僧の出現を期待するためにも、ぜひとも成功させたいことであり、ひろく世間に訴え、理解と協力を得るべきだと考えたので、私は三人の出発に際し、生活や修行についての手記を送ってくれるよう依頼した。ところが、一カ月経っても二カ月経ってもなんの音沙汰もない。言葉や気候風土ばかりでなく、同じ仏教とはいえ、あまりにも異質な要素を持つている上座部仏教の中に飛び込んだのだか

ら、そう易々と書けないのは当然、とは思いつつも、健康を害しているのではなからうか、心の張りを失っているのではあるまいかと案じられた。そこで、

「激励と取材にゆきたいが」

と話しかけたところ、黒田師は

「案内しましょう」

と、正に渡りに舟のひと言。

こうして六月、羽田を発ってドンムアン空港に着陸することになったわけだが、ムツとする熱気の中に三人の留学僧が出迎えてくれた。すっかり上座部仏教の比丘になり切っている彼らの姿に接した瞬間、杞憂は雲散霧消し、深い感動を覚えた。そしてワット、パクナムを訪れ、住職と副住職（日本人を父とし、タイ人を母とする人で、日本語に通じ、日タイ仏教の友好に大きな役割を果している）から、彼らが真面目に修行していること、喜んで後続者を受け入れ

たいという言葉を聞き、安心すると共に、はるばる足を運んだことの意義を確認したのだった。

その時、住職から、
「総持寺に仏像を寄進したい」といわれた。

「どのくらい大きなものですか」と問うと、

「身の丈二・三メートル」

とのこと、そんなに大きいのでは建物のことも考えねばならぬし、一存で返答しかねたので、一度帰って貫首禅師の意向を伺って返事すると約して別れた。

帰って岩本禅師に報告したところ、せっかくなので、十月、西村師（総持寺国際部長）・黒田師（同次長）と同道して、留学僧の研鑽の便を図ると共に謝意をあらわすものとして『南伝大藏

經』七十余冊を携行して参上、これを贈呈すると共に仏像奉呈の寄進状をいただいた。

一年有余ののち、

「仏像が完成したので、仏像寄付者の供養のため、日本僧侶による日本の法要をおこなってほしい」

との連絡があったので、五十四年春、ツアーを組んで奉迎の旅に出た。こうしてお迎えした仏像が総持寺宝物殿に安置してあり、タイ国の駐日大使が離着任の際にお詣りに来られる。

さて、総持寺の留学僧は三回目で事切れになってしまった。この時、黒田師の脳裡には、独力でも海外に留学僧を派遣しようという意欲と構想が湧いていたのであって、ようやくその機が熟した昭和五十九年、善光寺海外留学僧派遣育英会を結成し、翌年より留学僧を海外に派遣しており、ワット・パクナムには毎年二乃至三名を送っている。そんなわけで黒田師は年に兩

三度、ここを訪れている。去る八月には写真家の駒澤晃氏を伴って来訪しており、駒澤氏の写真と文章は『朝日新聞』（平成元年九月二十一日）の「にゆうす、らうんじ」欄を飾っている。このようにワット・パクナムと親しい間柄にある三人が先行したわけである。

手許にあるガイド・ブックではワット・パクナムを次のように紹介している。

古いトンブリ地区にもたくさんの寺があるが、チャオプラヤー河岸のワット・アルン（暁の寺）以外は、ほとんど観光客は足を向けない。数多くある寺の中でのお勧めは、ワット・パクナムという瞑想の寺。故プラ・モンコン・テムニ師が開いた瞑想修行のメッカで、学校や修道院も併設し、六〇〇人以上の僧や尼僧が境内に住んでいる。日本からも多くの仏教関係者がこの寺で学んでいる。本堂（注 布薩堂・ウボー

ソー）にはカッと眼を見開いたモンコン師そっくりの像があり、まるで生きているような豊かな表情に、像でなく本物の人間と思ひ込んで感動する人も少なくない。タマサートなどの舟着場から水上ボートで十五〜二十分ぐらい。運河の中にちよつとわかりにくい場所だ。

交通渋滞がひどく、一時間有余を費やして九時二十分ワット・パクナムに到着。十時に招待を受けて出かけるという副住職は門前で私どもの到着を待ち受けており、早速私達を本堂に請じ、住職共々快く歓待してくれた。

十時半に一行到着。黒田師の案内により食堂に入る。

上座部仏教の比丘は、仏戒に従って正午から翌朝に至るまでは固形物を口に入れてはならないので、食事は正午前に終わらなければならぬいし、食事の前後には読経があるので十一時に

は食事をはじめなくてはならない。

また、食事は托鉢によって得たものを食するのであるが、このワット・パクナムでは托鉢に費やす時間を修学弁道にあてようと、前任職の時代から典座寮を整備し、十年ほど前りっぱな食堂（サーラー）が完成した。そして信者は金品を寺に持参して供養してくれることになっている。

私どもがサーラーに入った時はすでに食事を供養する大勢の信者が集まっていた。十一時、比丘たちが入堂し、禅堂の単のように一段高い座につき、展鉢読経をはじめた。

禅堂の食事を思えばよい。ただ、供養の施主があれば僧堂では知客和尚しかおしょうが香を焚きながら施主を引いて堂内を一巡するのだが、ここではその必要はない。というのは比丘の座は正面と右横にとつてあり、一段低い真ん中の広い場所は信者の席になっていて、信者は坐つて比丘の姿

を見渡すことができる。また香は焚かないし、施主の世話をしていたらひ比丘は食事の時を失つてしまう。香の代わりが、各自が小さな浄水の器をもっており、手指を洗い、堂を出るとき、その水を草木にそそいでいる。

比丘の食事が済むと住職は供養の施主一人一人にB4より少々小型の額に入れた領納書を読み上げて手交する。信者はこれをおし戴いて帰宅して部屋に飾り、感謝し、かつ供養したことを誇りとしている。時には子供までがお小遣いを供養に差出している。小額の供養には額に入らない領納書が渡されるが、子供たちは貰つて嬉々としている。

比丘の食事が終わったあと、供養の施主はそのおさがりを頂戴するのだが、私共一行には、便宜をはからつて比丘と同時に食事をさせてくれた。

品のいい一婦人が供養に来ており、私共のた

めにアイスクリームを全員に供養してくれた。
聞けば昨年、来日した際、十年前の総持寺留学
僧小林良禅君（長野県）がいろいろ世話をして
くれたことに対するお礼のしるしとのことだっ
た。

この国の人びとは、小さなタネが大きな樹木
に成長するように、たとえささやかなりとも供
養のタネを蒔けば、必ず大きな果報が約束され
ることを深く信じ、大は大なりに、小は小なりに
に常々供養に心を致し、特に仏法僧の三宝に供
養することを重視している。また、寺の門前で
は籠に入れた雀や亀などを売っている。これは
寺にお参りしたあと、その徳を他の生き物にも
分かち与えることによつてより豊かな幸福を得
ることができるとの信心によるもので、雀はそ
の場で空に放たれ、亀は水中に戻される。いわ
ゆる放生ほうじょうが日常の間におこなわれている。

三宝供養の心を忘れ、「放生」の言葉を知らな



いわが国の現状を思う時、この点はまことに羨ましい限りであると同時に、私共の布教と努力の足りなさを泌々反省させられる。

チェンマイからスコタイへ

ワット・パクナムを辞して、午后のひと時を有名寺院の拝観に過ごし、十六時半離陸、約一時間のフライトでチェンマイに着く。

チェンマイはバンコックに次ぐタイ国第二の都市で、バンコックから北に七〇〇キロ、海拔三〇〇メートルの高地にあるので、平均気温は摂氏二十五・六度という、しのぎやすい土地である。街並みは清楚で落着いる。人びとの肌色も白く、美人の産地といわれる。

チェンマイは古都で、市内には城門や城壁、堀や砦などが残っており、いかにも旧城下町といった風情で、日本でいえば京都を思わせるたがずまいである。

一二九二年、メンライ王ははじめチェンマイに都を開き、ついでこの地に都を移した。チェンマイとは「新しい都」という意味だそうて、ここにランナー・タイ王国が誕生した。この王国はインド文化をとり入れた結果、チェンマイはタイ北部の文化的中心として長く繁栄を誇った。寺もその頃から建設されたもので、ワット・ウモンなどは一二九六年にメンライ王によって建てられたという。大きな古いパゴダは、ロイ・カトーン祭りの日には美しいローソクの灯に包まれるという。また、ドイ・ステープ、ドイとは山の意、つまりステープ山はチェンマイの西十五キロにある標高一六七七メートルの山で、その中腹、一〇七三メートルにあるワット・プラタート・ドイ・ステープからはチェンマイの市街が一望できる。この寺は一三三三年、ジュエナ王によって建てられたものとのことで、チェンマイはバンコックとはひと味違った寺院

観光の地でもある。

チェンマイに二泊して、十一月十一日朝、スコタイに向けて出発する。長いバスの旅である。

スコタイはチェンマイから南に約三〇〇キロメートル下がる。北部の山から降りて、中部の平野に出た地帯である。ここに一二三八年、最初のタイ人の王国が生まれた。前出メンライ王がランナー・タイ王朝を築いたのとはほぼ同時期



に、タイ族の別の集団がさらに南下して稲作に適した平野に到達し、当時クメール人が支配していたスコタイを攻略してここに都をつくり、タイ人のはじめての統一国家スコタイ王国を建設した。スコタイとは、梵語「スコーダヤ」の訛で、「幸福のあけぼの」を意味するという。

スコタイ朝の王は代々仏教の布教と保護に並々ならぬ熱意をみせたので、仏像をはじめ仏教美術はスコタイ独特の美しいのびやかな風格を生み出している。

一四三八年、アユタヤが直接統治するに至まで、スコタイ王朝は八代二〇〇年続いた。それは日本の鎌倉時代（一一九二～一三三三年）とほぼ同じ時代である。

ロイ・カトーンの祭り

朝から曇り空で、日本を思わせるような天気だった。しかし、雨季が終わったのだから雨に



はなるまいと思いがらバスに乗る。

九時過ぎ、バスのフロント・ガラスにポツ、ポツと小さな水玉模様があらわれて来た。＼やはり雨だ＼と思っていると九時二十分頃本格的な雨となった。ガイドはいう、

「ロイ・カトーンの雨です」と。

ロイ・カトーンの雨、そういえば、北国である私の郷里では、二月の十三、四日になると、きまつたように、うす汚れた雪の上に、美しい真っ白な雪が舞い降りてくる。これを「涅槃雪ねはんゆき」というのだと聞いたとき、私は感動したものだ。雪のない南国の釈尊のご入滅ごにじやくが雪で荘厳されるとは、なんて素晴らしいスケールの大きなことだろう、と。また、授戒会の時は、戒期中に一度は雨に見舞われる。ロイ・カトーンの雨は正に甘露の法雨である。

日本ではもはや見られなくなった「ピック・アップ」と称する、無蓋の小型貨物自動車が、

タイでは走っている。タイでは大事な必需品であり、荷物代わりに人がいっぱい乗っている。手に手にカトーンをもった彼らは、いずれも甘露の法雨を浴びて明るい表情をしている。一台だけではない、二台、三台、五・六台、すべてのクルマはスコタイへ、スコタイへと、ひた走りに走り続けている。今晚の前夜祭を觀にゆくのであろう。

日本の雨と違って実に思い切りがよく、五分後にはサツと晴れ上がった。たまに見る路傍の露天にはカトーンが並べられてある。カトーンは、丸形の台の上にバナナの葉で花の形をつくり、その上に、ローソク、線香を立て、供物を載せるものである。

正に天も地もロイ・カトーン一色の風景である、ロイ・カトーン、どうしてこれほどまでに人の心を惹くのであろう。チェンマイのホテルは、ロイ・カトーンの祭りを觀に来た客でいっ

ぱいだった。日本にはあまり紹介されていないか、会った日本人は数人に過ぎない。欧米人が一番多く、ついで台湾・韓国の人たちが目についた。スコタイのホテルは満配で泊まれないというので、私共は数十キロ離れたピサヌロークに宿をとらざるを得なかった。

ここで、ロイ・カトーンとは一体何なのかについて思いをめぐらしてみよう。

インドでは四月から七月にかけて雨季なので、釈尊は、四月十五日から七月十五日までの九十日間、弟子たちの外出を禁じ、一堂に会して修行させた。それを「雨安居うあんご」または「九旬安居くじゆんあんご」というのだということは小僧時代から教わってきた。ところでこの四月から七月というのは唐曆の示すところであり、しかも旧曆なのだから一カ月以上のズレがあるはずなのだが、それでもなお現地の実情とは合っていない。インドのことは論外として、タイでの雨季は七月

から十月にかけてであり、安居（パンサー）の始時と終時は年によって異なる。今年の安居の入り（カオ・パンサー）は七月十八日、安居の明け（オク・パンサー）は十月十四日だった。

バンコックの博物館で求めた『タイの花鳥風月』（レヌカーホームシカントーン著、めこん刊）「雨季（ルドゥー・フォン）」の章のリードには次のような文が綴られている。

降り注ぐ雨に潤って、生えて、伸びて、茂る緑。魚も亀も鱉も、溢れた河から泳ぎ出てきて、大騒ぎ。

大自然のエネルギーに圧倒された人間たちの雨季は、籠もりの時。三カ月と時を限って、青年たちは僧門に入り、戒律に生きる。愛する者の修行を支える女たちは、毎朝の托鉢に深い思いを託して、ひたすらに雨季明けを持ちわびる。

荒々しくきびしい冬の寒さから解放されて、

暖かく陽気な春を迎える時のよろこびを数十年間身にしみて味わって来た私には、この国の人びとの雨季明けを待つよろこびの情がよくわかるような気がする。

雨安居明けの七月十五日は、日本では孟蘭盆の行事がおこなわれる。即ち、神通第一の目連尊者が、今は亡き母が餓鬼道に堕ちて苦しんでいるのを見て、自らの神通力で救おうとしたが果たし得なかったので、釈尊に教えを仰ぐと、釈尊は、七月十五日、十方の修行僧が安居を終えて自恣の行（安居中の罪過を指摘し、また懺悔して、善に進む行事）を行う時、百味の食べ物、果物、香油、ローソク、臥具を用意して供養せよ。そうすれば父母祖先は餓鬼道や地獄の苦しみから救われるであろう、と教えられた。目連がその通り実行すると、母はその日のうち餓鬼道からすくわれたというのであって、これに従って中国や日本では孟蘭盆の行事がおこな

われてきた。

では、タイではどのような行事がおこなわれているのだろうか。「タイに与えた中国文化の影響」(敦賀女子短期大学専任講師・田辺和子『思想の動き』14 東方研究会所収)によると、

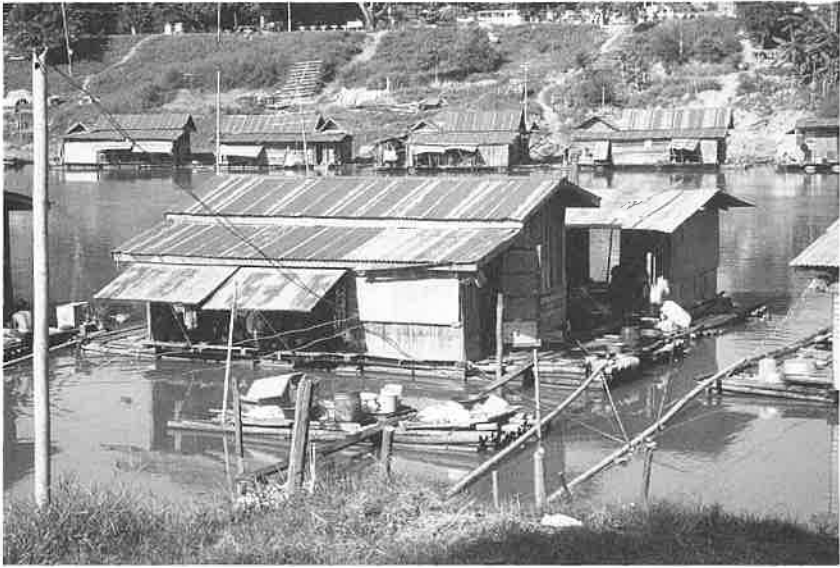
タイの人々は、自恣の日に供物を持って、ワットと呼ばれる寺院に集まり、テー・マハチャーという行事を盛大に行う。マハチャーとは、パリー語のマハージャーテイのことで、「偉大なる本生」という意味である。すなわち、慈悲のため子供や妻をも布施したというヴェッサンタラ王子の実践を伝えるヴェッサンタラ・ジャータカを比丘たちがかわるがわるに一日で読誦し、そしてそれについての法話を講ずるという行事である。(中略)〔これは〕「ヴェッサンタラ・ジャータカに述べられている、布施行や慈悲心の人々にまじめに実践することを奨励し

ているように思われる。)

また、タイでは、雨季の終わる自恣の日より一カ月後の満月の夜に、ロイ・カトーンと呼ばれる灯籠流しの行事が行われている。

タイにおける灯籠は、バナナの葉で花の形をつくり、その上にローソク、線香を立て、供物をのせて、川や運河、池などに浮かべてやる。川で溺れ死んだ人々の霊を導くためといわれたり、川の霊をなだめるためといわれている。

以上でご理解いただけたように、ロイ・カトーンは日本でいえば「灯籠流し」である。タイの正月は四月だという。すると十一月は正に日本のお盆の季節である。また、雨季明けて一カ月後といえば、日本では、冬の寒さから解放された一カ月後の花見の時期に相応する。ロイ・カトーンは正に、精霊供養を表に掲げた、日本



ピサヌロークはタイで一番水上生活者が多い

流にいえば、盆と正月をいっしょにしたような祭りであり、花見である。それだけににぎやかなものである。

ピサヌロークは、タイ中部と北部の接点に位置し、経済・交通の要衝として栄えてきた街で、あとで述べるアユタヤ時代には二十五年間タイの首都となったこともある。

十二年前、バンコックからここまで飛行機でやって来て、ここからクルマでスコタイに出かけたことがあるが、その頃の街は貧弱できたなく、ホテルは実にひどいものだった。それで、ピサヌロークに一泊すると聞いたときはいささかへきえきしたのだったが、来てみると街並みはすっかり変わっており、大きなホテルも軒をならべていたので安心した。

前述の、ワット・パクナムから総持寺に寄進された仏像は、プラプッタ・チナラートという、

タイではもつとも美しい仏像とされているのだが、この仏像は実はピサヌロークの北の方、ナン川の近くに建っているワット・プラシー・ラタナ・マハタートの本尊仏である。かつて、この地でビルマ軍の侵入を防ぎとめ、タイ国を護ったという靈験あらたかな仏像として有名である。昨年四月、黒田師がワット・パクナム住職・副住職を招いて、四人の子息の得度式を挙行した際、同じ仏像が黒田師の住持する横浜善光寺に寄進された。

さて、ピサヌロークのホテルを出て、十時半、スコタイに着く。

スコタイはかつてビルマとの戦いに破れて廢墟と化した。寺院の屋根と壁はすっかり焼け落ち、林立する巨大な焼け棒杭のような柱の間に露天の大仏が鎮座ましまして。

二、三十年前、ユネスコも保存に協力した遺跡は、スコタイ歴史公園と、北方六十キロにあ

るシサチャナライ歴史公園の二カ所に分かれている。スコタイ歴史公園は、東西南北に四つの門を持つ城壁は、東西約二キロメートル、南北一・五キロメートルの中に数多くの寺院がある。大部分は戦禍を被った無残な姿をそのままとどめている。

正に祭りである、村の鎮守の祭りのあの雑踏を極限にまで拡大したような人、人、人の波。

交通が規制され、外国人観光客のバスは多少優遇されているものの欲するところまでクルマを進めるわけにはいかぬ。城外に駐車して、車外に出ると途端に熱気の襲撃を受けた。炎天での歩行は老体には全くこたえた。が、駒澤氏は重いカメラ・バックを担ぎ、

「仏さまは皆同じ方向に向いておられるから、午後はダメだ」

と、ぼやきながらも、角度を選び、汗だくにな

つて撮影を続けている。『えらいもんだなあ。弱音を吐いては罰が当たる』とは思いつつ『それにしても写真家にならなくてよかった』と、やはり弱音を吐く私だった。

午後の強烈な日射のもと歩行にはいささか参ってしまった私だったが、夕食済んで再度城内に入る頃は、「私も五時から男かなあ」といつてみんなを笑わせるほど元氣を取り戻した。

人混みは日中に数倍していた。無数の炬火が赤々と燃える中、爆竹は鳴る、子供は処かまわす火花を打ち上げる。しかし、ただ単なるお祭り騒ぎではない、露座の仏像の前には善男善女が列をなして香華灯燭を捧げ、合掌低頭している。

四方を掘て囲まれたワット・マハタートの、アユタヤ時代に再建されたという野ざらしの大仏はひときわ目を引く。その大仏にライトがあたりられ（これはいささかイメージ・ダウンだった）

た）、その四圍の堀にたくさんのカトーンが浮かべられ、それを合掌で見守る人びとの姿。喧噪の中の静寂。それは日本では到底見ることできない美しい光景であり、敬虔な姿であった。

『地藏菩薩本願經』「利益存亡品第七」に、

もし男子女人ありて、在生に善因を修せず、おほく衆罪をつくるに、命終ののち、眷属小大、ために福利一切の聖事を造らば、七分の内、而も乃ち一を獲ん。六分の功德は、生者自ら利せん、是を以ての故に、未_{みづか}来_{らい}現在_{げん}の善男女等聞_{ぜんなんにとうき}け、健_{すこや}かなるとき、自_{みづか}ら修_{しゆ}せば、分_{ぶん}々に己_{おの}れに獲_えん……

とあるが、供養することによって六分の功德に報いられることを堅く信じているものの姿のように見受けられた。

石川画伯と駒澤氏の素晴らしい絵と写真に相まみえること一日も早からんことを祈念してこの項を終わる。



ワット・ヤイ・チャイ・モンコン本堂を囲む沢山の釈尊坐像

アユタヤ

旅もいよいよ終盤を迎えるに至った。十四日朝、ピサヌロークを発ってアユタヤに向かう。バスで五時間の旅である。

アユタヤ王朝の興ったのは一三五〇年。タイ最初の統一国家として栄えたスクタイ王朝を滅ぼし、三十三代、四一七年長きにわたって栄えた王朝である。一七六七年、ビルマ軍の攻撃に破れ、国土は壊滅状態となった。その後反撃してビルマを撃退したが、タクシン王は、あまりにも無残な破壊ぶりに王都の再建を断念して、都をトングリ（ワット・パクナム所在の地）に移した。そしてトンブリ王朝は十五年間続いたのち一七八二年、バンコックに遷都して現在に至っている。今から七年前二百年祭が盛大にこなわれた。

アユタヤ王朝代々の王は仏教を保護し、スコ

タイ仏ののびやかな表情に代わって、クメール
仏の冷たく硬直した表現を模倣したアユタヤ洋
式の仏像が造られるようになった。

訪れた私共の眼にふれるものは、スコタイと
同様、石と煉瓦でできた廢墟である。しかし、
緑樹は美しい花をいただき、迦陵頻伽かりょうびんがはたのし
くさえずり、時の経つのを忘れさせる。ワット・
プラシサンペットの三つの白いパゴダは実に見
事なもので、十五世紀に建てられたが、十八世
紀にビルマ軍に破壊され、現在建っているもの
はバンコックに王朝が移ってから再建されたも
のという。

残念ながらこの日は火曜日、休館日で博物館
を観ることができなかつたが、ここで忘れてな
らないのは、山田長政と日本人町のことである。

アユタヤの街の南、チャオプラヤ河（メナム
河）の畔に旧日本人町跡がある。そこに三方国
語で書かれた三面の碑が立っている。フィルム

に納めて来たので、日本語文を転記すると次の
ようである。

アユタヤ日本人町跡と山田長政

アユタヤは西紀一三五〇年より、七六七年ま
で四一七年間タイ国の首都であつた。この間第
一六世紀後半より外国人の渡来者は漸増し、彼
らは貿易や布教に従事したほか、義勇兵として
王朝に仕えるものもあつた。当時日本政府は朱
印状（外国貿易に従事する許可書）を發行して
貿易を奨励したが、朱印状を所持しない交易船
も東南アジア方面の貿易に従事していた。これ
らの貿易船のうち、タイの都アユタヤに來たも
のも多く、彼らは外国人と同様、国王から居留
地を与えられた。アユタヤには時代により、八
〇〇人から三、〇〇〇人の日本人が居たと伝え
られ、更にタイ、中国、ヴェトナムなどの従業
員を加えると、この日本人町に八〇〇〇人の人
が居たこともあると伝えられている。そして次

の人々がその首領であった。オークプラ純金(一六〇〜一六一〇年)、城井久右エ門(一六一〇年〜一六一七年)、山田長政(一六一七年〜一六三〇年)、糸屋多右エ門、平松国助(一六三三年〜一六四〇年)、木村半左エ門、アントニオ善右エ門(一六四〇〜?)、この内でも山田長政(静岡県出身と伝えられている)は日本人義勇隊長として実力者となり、ソングタム王の寵愛を受け、オークヤー・セーナービムツクの爵位を授けられた。一六二八年、王の死後、長政は二人の王子に忠義を尽くしたが、ナコン・シータマラート(南タイ)に叛乱が起きたので、都を離れ、叛乱軍平定後、同地の太守となったが、程なく同地で客死した。

一九三五年(昭和一〇年)、バンコックに設立された泰日協会は、オランダ、東インド会社の文献に基づき、この地旧日本人町跡を発見し、その内、約七ライ半(一、二〇〇平方^{メートル}米)を入

手することが出来た。それ以来、泰国日本人会の協力援助を得て、この遺跡の保存に当たっている。

一九七二年二月一日

泰日協会長 ビヤ・マハ・サワン

いま、タイ国日本人会の手によって、記念資料館の建設が進められているが、黒田師は、記念館が出来てもお墓がなくては供養にならないとて、この記念館の近くに、山田長政以下日本人物故者のお墓をつくりたいものともくろみ、タイ国日本人会に折衝している。

むすび

アユタヤからバンコックまで七七キロメートルに過ぎないが、いずこも同じ車のラッシュユで、バンコックの国立博物館に着いたのは十一時を過ぎた頃だった。この博物館は東南アジアで最大規模のもので、ゆっくり見てまわると半日は

かかるというが、昼食前とてそんなに時間はとれず、さっと一巡して二時頃の昼食となった。ここで激辛のタイ料理に挑戦してみたが見事に敗退を喫した。

バンコックで最後の夜を過ごし、翌十五日は早朝七時にドンムアン空港を離陸して十四時四十五分、なんのハプニングもなく、無事成田の地を踏んだ。

阿部慈園先生をはじめ、同行各位のご芳情に厚く謝意を表してペンを擱く。



タイ国ワットパクナム訪問記

中外日報記者 形山俊彦

タイへの導き

タイは一度は訪れてみたいと考えていた国だった。国民の九四％が仏教を信仰する仏教国というイメージ、あるいは「微笑みの国」との観光案内に、かつてないイメージをふくらませてしまったのかも知れない。だが、もう少しはつきりとした思いもあった。

日本仏教の現実的側面を取材する毎日に追われるうちに、胸の中になだかまる何物かを感じ

ていた。それが何であるかを明確にし、そのものの意味を知るには、教団の中で走り回っているだけでは難しいと思われた。日本の仏教が直面する問題を整理しておかなければ、という焦りにも似た気持ちをつのらせながら、毎日の仕事に追われていた。

「タイへ一緒に行きませんか」と、思いがけず声をかけて下さったのが、横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺住職黒田武志師である。鎌倉や湖北の仏たちを撮影して仏教界にも知られる

写真家の駒澤晃氏と三人で、雨安居中のワット
パクナムを特別に取材してみないかという話だ
った。

願ってもないチャンスではないか。黒田任職
は二十三年前の昭和四十一年一月、大本山総持
寺の特別僧堂第一期生としての修行を終えて中
外日報社の第二回インド仏蹟巡拝団に道友とと
もに参加し、その足でタイのワットパクナムへ
入って得度修行、以後も何十回となくタイを訪
れている。この人に案内してもらえば、初めて
のタイも痒いところに手が届くような旅になる
に違いない―そんな下心も動いたようだ。

仏教のふるさとインドへは昭和五十九年一
月、中外日報社の第二十回インド仏蹟巡拝団の
随員として派遣してもらい、そのヒンドウー的
世界に触れて圧倒された経験がある。インドに
仏教はないと言われ、事実、仏教遺跡を除いて
は日本人の私たちが考える仏教的なるものは存

在しなかった。しかし、およそ時間というもの
を超越したかのように思われるインドの村や町
を歩きながら仏蹟地を拝したとき、その遺跡が
間違ひなく仏教への信によって築かれたもので
あるという事実が歴史を超えて迫って来るのを
感じた。

仏蹟は日本の仏教徒の感情移入によって瞬
時、蘇るだけであって、保護された遺跡に過ぎ
ないともいえる。だが、私が見た夜のブダガヤ
大塔はチベット僧の巡礼団による五体投地の礼
拝行と読経の声に包まれてそびえ立ち、壁面に
灯されたロウソクの明かりが現し世の浄土のよ
うに金色の炎をくゆらせていた。

靈鷲山の法華経の会座から見おろす緑の小宇
宙。幾何学模様に組み立てられたナーランダ大
学遺跡の赤い煉瓦群は、仏教を学びとろうとす
る学僧たちの情熱といのちの輝きを物語ってい
た。インドは仏教の聖地である。しかし、振り

返って日本仏教を考えようとするとき、比較すべき生きた仏教がインドにあると言えらるだろうか。

次に行ってみるべき国はタイしかない、いつしか心に決めていた。「仏教の歴史は異端の歴史」とまで言われる。中国から韓半島を経由して日本に伝来した仏教は、民俗化の過程でそれぞれに変容をとげた。それに対し、根本主義的立場を主張する学者からは、変容した仏教は釈迦仏教に非ずとの批判がぶつけられる。しかし、中国の変容も、日本の変容も、すべて呑み込んで生き続けているのが大乘仏教の歴史であることは事実として認めるしかない。そうしたこと考える上でも、南方上座部の戒律厳しい仏教国の僧伽の実際の姿をこの目で見ておきたいと思っていた。

雨季の首都へ

八月二十二日。どうしてこんなに、と思われるほど、成田空港は海外旅行者でごった返していた。搭乗時間に充分間に合うように上野駅に着いたつもりが、成田空港直通のスカイライナーが満席で予約出来ない。慌てて特急に飛び乗り、辛うじて空港の出発ロビーにたどり着くと、黒田住職が人波をかき分けるようにしてやってきて私の腕をつかんだ。その向こうで駒澤氏がカメラバックを片に作務衣姿で待ちわびて立っていた。

東京―タイ間を就航して間もない全日空の916便は予定より三十分遅れて午後四時五十分

に飛び立った。隣の駒澤氏は口元に髭をたくわえ、忍者のようないでたちに見える。出来るだけ身軽なスタイルでタイへ乗り込むつもりらしい。二台のカメラを取り出して準備をしている



朝から施しをする信者があとをたたない

左手首に小さな数珠がはめられていた。

タイとの時差は二時間。約六時間でバンコクのドンムアン国際空港に着く。ゲートを出ると夜の九時。チャオプラヤ河（いわゆるメナム河）のほとりにあるシャングリラホテルに入った時は十一時を回っていた。日本時間では夜中の一時過ぎである。雨季のこの時期、気温は三十二度前後になる。しかし私たちの訪問中、最後の一日を除いてバンコクは曇天でやや涼しく、暑苦しい東京からタイへ来たおかげで、暑さはさほど気にしなくて済んだ。

静と騒の朝

翌日は早めに起床し、六時にホテルを出る。朝の街を見なければバンコクへ来た甲斐がない。タイ僧の托鉢風景をぜひカメラに収めたいと駒澤氏と前夜話し合ったところだった。暁闇の頃、掌の筋が見えるようになると、僧たちは

ワット(僧院)から黒いブーツ(鉢)を抱えてピンタバート(托鉢)に出る。黄衣をまとい、素足で歩く姿を写真などで見ると、それが南方上座部仏教のすべてを象徴しているように思われたものだ。

驚いたことに、大通りに出ると、まだあたりはうす暗いというのに、街はもうたくさんの人々が動きだして活気を呈している。街角のあちこちに屋台が出て、揚げ物や麺類を売りはじめている。屋台といってもリヤカーを改造したもので屋根のついたものや、自転車をつないで移動できるようにしたものもある。

ベンツのマークを着けたバスが走る。トラックを改造した乗り合いバスや、懐かしいオート三輪の「ダイハツミゼット」を改造したサムローと呼ぶ乗り合い自動車、それにバイクがあふれるほど次から次と走り抜ける。乗用車はたいていトヨタ、ニッサンだ。バイクは圧倒的にホ

ンダ、ヤマハである。大型のバスになるとベンツになるが、改造の得意なタイ人の手にかかるものだから、外観はベンツでも中身は別物ということもあるらしい。

喧騒の巷をよそに黄衣の僧が黙々と歩いている。うす暗い街角を、まるで裸のからだに黄色い衣を巻き付けたような姿の僧が列をなして歩く。不思議にその異形が街の風景に融けこんで、違和感を与えない。道を行く人々も、僧に特別の関心を払うわけでもないように見える。

大通りに面した商店の前にテーブルを出して、その上に幾つものビニール袋に取り分けた食べ物や並べて待つ中年の婦人がいた。袋の中に何が入っているのかまでは確認出来ない。やがて托鉢の僧が婦人の前に来て立ち止まる。婦人は合掌し、おじぎをしてからビニール袋の一つをつまみ上げて僧の鉢に入れ、再び合掌する。僧たちはゆっくりと列を作り、順番に供養を

受けている。布施行が無言のうちに繰り返される。別の場所では僧の前に進み出た男性が、合掌して布施したあと、そのまま道路に正座して深々と額ずき礼拝した。両親に伴われて供養する女の子もいる。施す方も多くは素足になっている。

托鉢コースは決まっているのだろうか。亡くなった人の供養の日などに、特別に施しをする人もいるという。僧たちは持ちきれない施物を途中で一カ所に置いたりしながら、再び歩いた。この托鉢で得た糧がタイの僧院の朝、昼二食を支えている。

タイの朝はまさに豊饒の風景ではないか―布施行がこのような形で日常化していることに思いついていめぐらせてそう感じた。南方上座部仏教のすべてを象徴する風景であると考えたとしても、それほど間違っていないだろうと思われた。しかし私は、この後、黒田住職とともに訪問し

たワット・パクナムで、タイ仏教の大きな変化の姿に直面した。そのことから、日本仏教との比較をより鮮烈な形で迫られることになる。

おびただしい僧房群

チャオプラヤ(メナム)河をはさんでバンコクの対岸にあるトンブリ地区は、ラーマ一世によって一七八二年からバンコクを首都とするクルンテープ王朝が誕生するまでの十五年間、王都の置かれたところである。タイは東南アジア諸国の中で模範生と言われる成長ぶりを見せており、首都バンコクはあらゆる機能が集中するタイ最大の都市である。トンブリは、いわば副都心とも言える位置にあるが、肥大化するバンコクに較べると、静かな郊外の町といった趣だった。

バンコクを南北に流れるチャオプラヤ河の支流は街の中を縦横に走っている。人々は川とと



200人程の僧侶が食堂で朝、昼食を共にする

もに生き、川の上で生活する多くの人々がいる。

「茶色の濁流で食器を洗い、衣類を洗い、歯も磨けば身体も洗う。この濁流の上を何十艘もの舟が、せめぎ合いながら水上を行き交い、食料品や日用品を売っている。おかゆやめん類の朝食も、この舟の上で作って売っている。まるで動く市場といってよいだろう。水は空気のよう人間と関わっている。私が修行したワット・パクナムもそんな川べりに建っている」

— 横浜・善光寺の黒田武志住職は、運河のある街の風景を、かつてこんな風に描写している。チャオプラヤ河の支流を船で渡って、トンブリにあるワットパクナムのすぐ裏手へ至ることも出来る。私たちはホテルからタクシーを走らせた。

タイには約二万五千のワット(僧院)があり、約三十万人の僧侶を数える。通常は二十万人の僧侶がいるが、この国には一生のうち一度、二

十歳に達する男子が剃髪して得度出家し、僧院生活を過ごすことを最大の功德とする社会習慣があり、七月中旬から十月下旬にかけてのパンサー(雨安居)の時期にウパサンパダ(得度式)を受け、一時僧が増えるため、僧の絶対数は一定しない。

黒田住職が一年半の修行生活を送ったワットパクナムの名は、わが国にもよく知られている。戦後、ここで修行した日本人は約八十人にのぼるといわれ、黒田住職が大本山總持寺特別僧堂で同安居の群馬県雙林寺住職石附周行師と一緒に、インド仏蹟巡拝の旅から引き続いてワットパクナムに入門した昭和四十一年には、高野山真言宗の佐々木弘伝師が修行中だった。

日本とタイとの仏教交流は戦後、ますます足しげくなり、深まった。遡れば明治二十年(一八八七)九月二十六日、「日タイ修好通商宣言」が調印されて以来、日本はタイと共に皇室・王室

を戴くアジアの国として、政府・民間レベルでの着実な交流の成果をあげている。

親善の証として明治三十七年(一九〇四)、名古屋に日泰寺が建立され、仏舍利が奉迎された。昭和十年にはバンコク日本人会により日本人納骨堂が建立されている。日本人納骨堂建立の最大の功労者の一人が高野山真言宗の横浜・増徳院住職藤井真水師であり、また、日本人納骨堂奉賛会の初代会長で、現在、バンコクに本部を置く世界仏教徒連盟(WFB)の本部事務次長をつとめる小谷亀太郎氏が、タイを訪れる日本人が僧俗を問わず世話になった日タイ親善の蔭の尽力者であることを忘れてはならないだろう。話が少し横道にそれた。ワットパクナムの伽藍を見てみよう。運河沿いに開かれた境内に、本堂、ワットパクナムの中興の祖ともいべきチャオ・クン・モンコン・テープムニーの遺骸を安置するブン・ホー(有徳の堂)、住職の住む

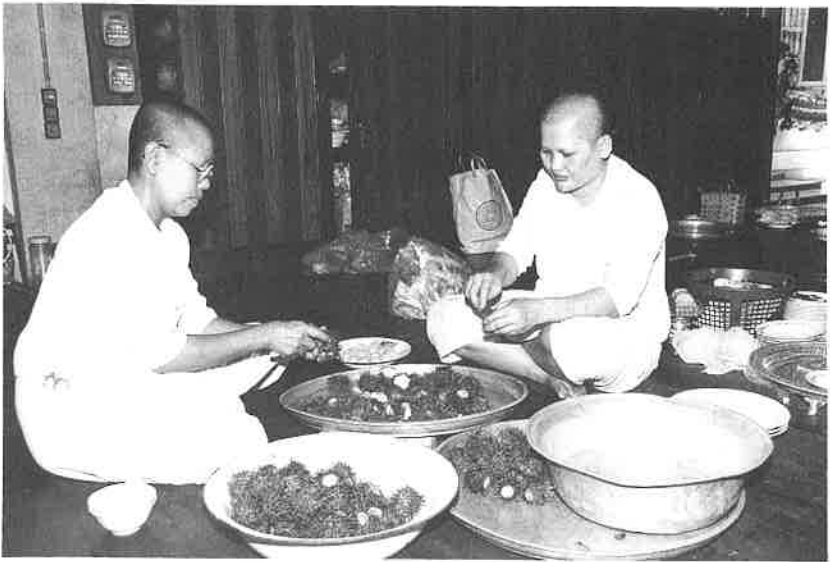
房、瞑想堂、大食堂、宝物館、図書館、図書館、位牌堂、そして、それらをはるかに上回る数の僧房がアパートのように立ち並んでいる。

あとで詳述するように、ワットパクナムはタイの他のワットと根本的に異なる生き方をしている。それは、すでに記したように、伽藍の中に大食堂をもっていることである。この大食堂に付属する台所によって、僧院に生活する比丘や沙弥たちの食事がまかなわれている。実際、午前十一時にはじまる昼の食事風景を取材して、五百人もの比丘や沙弥が台所から運ばれた食事をいっせいに食べる様子に、圧倒される思いだった。

典座制度を僧院に導入

それにしても、ワットパクナムで見た典座をどう理解したらいいだろうか。

南方上座部の僧は托鉢によってのみ糧を得



食事の用意をするメーチャー

て、自ら煮炊きしたり金銭を扱わない定めになつており、食事に関する戒律は細部にわたつてゐる。もつとも、美食は慎まなければならぬが、僧の食べ物が進進料理でなければならぬという考え方はタイにはない。

基本的なことは、正午から翌日の夜明けまでに食事することが禁じられている点で、早朝のピンタバート(托鉢)から帰つて朝食をとり、昼は十一時に食事をしたら、それで終わりである。

しかし、ワット・パクナムの台所は日本でいへば永平寺の典座寮のような活気を呈していた。料理を作るのはメーチーと呼ばれる剃髪した女性たちで、彼女たちは白衣を着て、出家した修行者と同じように日々精進努力している。私たちに尼僧と同じように見えるが、かつて存在した三百十一の戒律を守る比丘尼は今日、タイの僧院から消滅し、現在は、十戒を持する沙弥

に次ぐ八戒を守るメーチーしかない。

あれこれと考えるうちに、いささか混乱してきた。

ワット・パクナムが独自の生き方をしはじめてから、半世紀ほどになる。その歴史を振り返るには、ワット・パクナム中興の人、弟子たちから「ロンポー(父の意)」と親しみと尊敬を込めて呼ばれ、「プラ・モンコン・テープムニー」の称号をもつチャオ・クンについて知る必要がある。

昭和五十九年秋、ワット・パクナムでチャオ・クンの生誕百年祭が挙行された。それを記念してチャオ・クンの像をまつる礼拝堂が建立された。像はチャオ・クンが瞑想する坐相をかたどつたもので、在俗の信者たちが貼りつけた金箔で全身が覆われている。

お堂の横に三階建てのパーリ研究所がある。その階上にチャオ・クンの遺体がミイラとして今も安置されている。このため、この建物は「ブ

ン・ホー」とも呼ばれる。内部は、正面に棺が置かれ、その前にロウ人形のチャオ・クンの像がまつられており、信者たちの礼拝する姿が絶えない。このほかに、チャオ・クンの肖像は諸堂の随所に掲げられている。

チャオ・クンの生涯については、ワットパクナムから発行している小冊子『チャオ・クン・モンコン・テープムニーの生涯と教え』(T・マグネス著、藤吉慈海訳)に詳しい。それによると、チャオ・クンは一八八五年、貧しい農家に生まれた。九歳の時、勉強のため比丘だった伯父の寺へあずけられる。十四歳で父親が死に、家業を継いだ。

舟で米をバンコクへ運ぶ仕事に明け暮れるうちに、チャオ・クンは盗賊に襲われ、死の恐怖を体験する。それがきっかけとなって二十二歳の時、ついに出家を決意する。学問と修行の遍歴がはじまった。托鉢で食を得ることが出来ず、

餓死を覚悟するほどの状況に追い込まれた経験の中で、チャオ・クンは「比丘や沙弥たちに食物が支給されるような台所をつくろうと心に誓った」という。

比丘や沙弥たちが托鉢にまわる時間を節約して、学問が出来るようにと願ったからだそうだ。

チャオ・クンは比丘になって十三年目にワットパクナムへ入り、その後継者となった。彼は独自の瞑想法の実践により涅槃を得る道を比丘や沙弥や優婆塞、優婆夷、その他たくさんの俗信者に教えた。ワットパクナムは瞑想による修行の寺として有名になった。

同時にチャオ・クンは、修行時代に誓った通り、比丘たちが托鉢をしなくても毎日の食事が出来るように、タイで唯一、そして、おそらく南方上座部仏教の歴史上においてもかつてあり得なかつたであろう、僧院に典座の制度を導入するという革命的な改革を成し遂げたのである。

施主らは下座から供養

十一時から大食堂で昼の食事がはじまる。時間になると、本堂周辺に黄衣の比丘や沙弥たちが僧房から続々と集まってくる。私たちが訪問した時、ワット・パクナムには約八百人の僧がパンサー(雨安居)修行を行っていた。その内訳は、およそ比丘四百、沙弥百、一時僧百七十八、メーチー(剃髪の女性)二百。食堂の典座係はメーチーの仕事になっているから、五、六百人も比丘、沙弥が一斉に食事することになる。

からりと晴れ上がったタイの空の下で見る黄衣の群れは金色に輝いてまぶしい。本堂前の僧列は十一時ちょうどに大食堂へと移動しはじめた。内部は一段高い僧の座と、低い俗信者の座とに分かれている。正面にプラ・タム・パンニヤー・ボーディー住職が座り、その右手を端から端まで比丘、沙弥たちが座って埋めた。下に



ワット・パクナム住職に食事を施す信者

は本日の食事の施主である信者たちが座っている。

住職の導師により読経がはじまる。ことし六十四歳になるプラ・タム・パンニヤー・ボーデー住職の張りのある声がマイクを通して堂内に響く。日本でいう「食事五観の偈」に当たる経文を唱え終わると、僧の身の回りを世話するデクと呼ばれる少年たちが食事を運ぶ。僧は三、四人ずつ車座になり、タライを伏せたような形の丸い食卓を囲んだ。

施主たちは供養する食事を僧に差し出す。とくに住職の前には食べ物や袈裟その他のさまざまな施物が信者によって施される。住職はにこやかにそれを受け取り、信者たちの合掌に応えた。

メニューは、卵、肉料理、野菜の炒めもの、スープなど、なかなか豊富な内容だ。大きなお盆に料理の盛られた小皿が七枚。その他にもフ

ルーツを盛った皿などが横に置かれている。ライスとおかずをスプーンですくいなから食事がはじまる。台所ではメーチーたちも食事の座についていた。

僧たちの食事が済むと、今度は施主に対する儀式に移る。まず供養した施主に対してお経が読まれる。施主は小さな錫の容器に入った供養水を指にしたたらせながら、功德を授かるようにと念じる。願い事を書いた紙をコップの中で燃やす人もいる。読経が終わると、住職から施主に、額に入った立派な供養の証明書が一人ずつ直接手渡された。この後、施主は僧の残した料理をいただいて食事をする。

ワットパクナムが、托鉢によってのみ糧を得て自ら煮炊きしたり金銭を扱わないという戒律に生きるタイ僧伽において、典座制度を導入したことは、革命的な変革であると先に述べた。この事実は、中国の百丈懷海禪師が禪林の清規しんぎ

を定め、僧団の自給自足を確立したという禪宗史上画期的な出来事以上の衝撃を現在の私たちに与える。おそらく、南方上座部の仏教史上において、この事実の重みとその影響力は、将来にわたってはかり知れないものがあるだろう。

瞑想と学習と

ワットパクナムの修行僧の中に、日本からの修行僧が現在二人いる。一人は男性で真言僧の渋井修師、一人は女性で臨済宗の尼僧の山本浄月さん。二人とも黒田武志住職が横浜・善光寺の開創十五周年記念事業として設立した善光寺海外留学僧派遣育英会の育英留学僧として修行中の身である。同育英会は、これまでに二十二人をタイ、アメリカ、インド、スリランカ、ヨーロッパ、韓国の各国へ送り、また外国から日本への留学生を受け入ってきた実績をもつ。ワットパクナムへは二人を入れて六人が派遣されて

いる。

タイの僧伽に入れば、当然のことながら上座部の戒律を守る比丘となる。眉も剃って、すつかり黄衣が身についた渋井師と、白衣を着てメーチャーとして僧院生活を体験している浄月さんから、ワットパクナムの機構やタイの仏教などについて、日本人同士の気安さからいろいろと話を聞くことが出来た。

今回の旅は特別だった。戒律厳しいタイの僧院内部をどこまで取材出来るだろうか、という不安が出発前にはあった。通常の旅や取材で、タイの僧伽の修行生活をフランクな形で覗けるとは考えにくい。しかし、実際には、そんな堅苦しさは何も感じないで済んだ。ワットパクナムのプラ・タム・パンニヤー・ボーデー住職と黒田住職との信頼関係が全てを許してくれたからに違いない。

タイの僧院で住職の権限は絶対である。法要

の様や食事風景をカメラに収めるために室内を動き回る私たちの行動が許されたのは、住職が事前にそれを了解していたからに他ならない。プラ・ナム・パンニヤー・ボーデー住職は、黒田住職の顔を見るたびに「おー、よく来た」といわんばかりに、満面に笑みをたたえて自分の近くへ招き寄せた。その様子はまるで親子の対面のようにさえあった。

そんなわけで、私たちは、おそらく初めて、タイの僧院の台所の奥まで入り込むことができた。

典座の話に戻ろう。朝の托鉢をやめたワットパクナムでは、毎朝、メーチーが食料品の買い出しに出かけるといふ。その費用は信者からの布施によってまかなわれる。午前四時過ぎから食事の支度にかかり、中食はまた別のメーチーが当番となる。台所を運営するために、メーチーは何組みかに分けられ、交替で典座の役をつ

とめている。

ワットパクナムでは托鉢が消えてしまったのだろうか。いや托鉢をしたい人はしてもいいのだという。しかし、実際には、ワットパクナムの比丘たちはパーリ語の学習と瞑想に専念する僧院生活を送っている。しかも、洪井師によれば、こうしたスタイルの僧院が少しずつだが他にも出てきているというのだ。

パンサー期間中のワットパクナムの一日のスケジュールは次のようになっている。

▽四時起床

▽四時半～五時半〓本堂スワットモン(読経)

▽五時半～六時半〓食事

▽六時半～七時半〓本堂スワットモン

▽八時～十時半〓講義

▽十一時半～正午〓食事

▽十四時～十六時〓講義

▽十七時～十八時〓本堂スワットモン

▽十八時半〜二十時＝瞑想

▽二十時〜二十時半＝僧房スワットモン

▽二十時半以後自由

比丘や沙弥にとつて、僧院でパーリ語の学習をすることは僧としての生活の最大の目標にもなっている。托鉢をしない時間を南方仏教の聖典用語であるパーリ語の学習と瞑想の時間に充てること——チャオ・クンがワットパクナムに食堂をつくった最大の理由もここにあった。

大きい僧院には僧伽の教育機関として仏教専門学校が併設されている。そこでは仏教学やパーリ語の教育が行われる。パーリ語習得の過程は厳しい試験によって下級から上級までの段階があり、その等級とパンサー歴に基づく法臘などによって僧階が決まるというから、パーリ語習得は僧の必須科目と言える。

一方、メーチーは沙弥に準じた生活を送るが、浮世のさまざまな悩みを僧院生活でリフレッシ

ユして再び還俗してゆくという、現実的な関わりをする人も多いという。失恋や家庭問題など女性が遭遇する苦しみから逃れて出家し、あるいは仏教を学ぶ目的で、また、徳を積むために髪を落とす女性たち。その中に交じって生活をすする日本の尼僧の浄月さんは、ある意味では比丘として修行する渋井師以上に、タイ社会の隠された世界に触れていると言えるかも知れない。

タイ僧伽に新しい波

それは美しい光景だった。

私たちがワットパクナムの本堂へ向かって歩いていた時、一人の女性が渋井修師に供養を申し出たのだ。ワットパクナムで修行中の日本人真言僧である渋井師は、その場で傍らの木陰に腰を下ろし、正座して合掌する女性に對した。二百二十七の戒律を守る上坐部の僧は、女性にほんの少しでも触れることが出来ないし、女性





から直接施しを受けてはいけなさと定められている。受ける場合は布か何かを広げて端を持ち、その上に置いてもらう。渋井師もその戒律に従い、供養を受けた後、何かにこやかに言葉を変わした。彩り鮮やかな本堂の色と南国の緑、あふれるほどの光の中で繰り広げられた黄衣の比丘と信者のひと時の交流の姿が、タイ仏教の永遠の姿を象徴しているようだった。

仏滅後、教義をめぐって仏教は上座部と大衆部に分かれ、さらにそれが幾つもの部派を形成していった。南伝のルートにおいては仏教の伝統は今日、上座部仏教として東南アジアに伝えられ、北伝のルートは大乗のエネルギーを膨らませながら日域へと及んでいる。私たちは仏滅後二千数百年という時間を経て、仏教の大きな二つの流れが行き着いた姿を同時に見る事が出来る。いずれが正しくて、いずれが間違っているかという問いには意味がない。いずれもが

歴史の中で変容を繰り返してきたのだから。

そして、大きな変容のたびに原点回帰が叫ばれ、釈尊の教えの根本が求められた。変容を最小限度、現実的な部分にとどめるための努力が重ねられてきたのである。

ワットパクナムの選択した変革はタイ僧伽でどのように受け止められているのだろうか。それがタイ僧伽において公認されているものであることは明らかだった。その最大の理由は、現在ワットパクナムの住職がタイ僧伽において最高位にある僧であるという事実が示している。

タイ僧伽の頂点に立つのは全僧伽の長であり、「ソムデットプラサンカラート」つまり大僧正の僧階にある僧で、これはただ一人しかいない。次いで「ソムデット」つまり権大僧正、次いで「チャオクン・チャンピセート」(中僧正)と続く。

大僧正を会長とする僧伽の最高決議機関とし

て大長老会議があり、その構成メンバーは上記した僧階所有者のみとなっている。現在、ソムデットは八人、チャオクン・チャンピセートは六人おり、ワットパクナムの住職はその六人の一人で、大長老会の構成員の一人になっている。タイのトップクラスの僧と云ってよいだろう。

もし、ワットパクナムの生き方がタイ仏教界で異端視されているとしたら、その住職がタイ僧伽の最高決議機関に加わるなどということはあり得ない筈である。タイ仏教界は典座制度を導入した「革命寺」ワットパクナムの生き方を認めているばかりではなく、密かにその行く末を興味深く観察し、モデルケースとしているのではないかとさえ思われた。

わずか一日か二日の見聞で多くを分かろうとするのは極めて危険なことである。しかし、もう少しだけ飛躍して考えてみたい。チャオ・ク

ンが中国の百丈禪師にも匹敵する歴史的な改革をワットパクナムにもたらしたのだとして、その改革はやがてタイ僧伽全体を覆うものになるだろうかということである。

上座部仏教の僧は出家して厳しい戒律のもとに身をゆだね、すべての楽しみを犠牲にして儀礼の執行者として生きてゆく。タイの僧が社会とかかわるのはその儀礼活動においてであり、タイ人の生活の誕生から死に至るすべてにそれは及んでいるという。

僧伽は聖域として結界されている。僧が社会に対し直接に布教することがなくても、ワットにあって戒律を遵守し、修行に明け暮れる聖なる存在であることによって礼拝の対象となる。人々はタン・ブン(徳を積む)を目指して喜捨し、それによって僧伽が護持されている。持戒の生活は永遠に続いていく。

問題は、托鉢をやめることによって、その基

本が崩れることがないかどうかということだ。

日本仏教の有り様を見ると、明治五年に布達された「肉食妻帯等勝手たるべし」との太政官布告が当時の仏教界を騒然とさせて以来、戒律の問題は仏教の存亡にかかわる重要問題として常に論議を呼んできた。この布告が象徴するように、結果として日本仏教は今日、僧俗の結果を失い、僧宝は限りなく世間に近づいている。そのゆえにこそ、私たちはタイ僧伽に僧宝の伝統が生きている姿を見ようとしているのではないだろうか。

山田長政の雄図を偲ぶ

ワットパクナムで、激しいスコールに遇った。日本の夕立とも違う。けだるい空気の中で、猛烈な勢いで空から雨が滝のように降り続け、それは約二十分で通りすぎた。

その間、境内にいた人々は本堂の屋根の下や

建物の中に入って、ゆっくりとした時間を過ごすように、ただじっとしていた。

雨が上がるのを待ってワットパクナムを辞することにした。黒田住職、駒澤氏とともに副住職の部屋に挨拶に行く。副住職はブラ・パーワナ・コーソン・テラ師。この僧は日本人の父とタイ人の母を持ち、日本名を「河北国雄」という。

タイの高僧の中でただ一人、日本語に堪能で、日本とタイの仏教交流に大きな役目を果たしている。チャオ・クン・モンコン・テープムニーについて得度し、チャオ・クンの生前に親しく瞑想法の指導を受け、ワットパクナムで現在の指導にあたっている。その穏やかな風格は、接する者を自然に和やかな気持ちにさせるものがあった。

翌早朝、私たちは渋井師とともに、車でアユタヤへ向った。バンコクの北八八^キの道のりを

約一時間半で到着する。船でメナムをクルーズする観光コースもあるが、これでは半日をつぶしてしまふ。アユタヤは一三五〇年から四百七十七年間、アユタヤ王朝が栄えた古都で、十七世紀前半には約二千人もの日本人が住み、日本人



チャオプラヤー川で水上生活者に昼食を売る。

町もあつたことで私たちにもなじみが深い。

朝露を踏みながら、かつての王宮の遺跡内を歩くと、ほぼ中央に巨大な三基の仏塔が天を突いて立っている。ワット・プラ・シー・サンペットと呼ばれる仏塔だ。

有名な観光地であるのに、遺跡は歴史の通り過ぎた形をそのまま残したように保存されている。緑の芝生と赤い煉瓦、そして色のはげ落ちた白い仏塔のコントラストを眺めながら、時の無い世界へ導かれていくような錯覚を覚えた。

「最勝吉祥王仏寺」と入り口の門に記されたプラ・モンコル・ボピットという寺院でタイ最大の高さ一八メートルもある大仏を拝み、さらに少し離れたところにあるワットロカヤスタ、通称「涅槃仏寺」を巡り、国立博物館を一覧して金や宝石など見事なアユタヤ王朝の重宝類にため息をついた後、日本人町跡を目指して田園の中を車を走らせた。

日本人町跡はチャオプラヤ(メナム)河に沿ってある。現在、日本政府の出資により記念館建設のプロジェクトが進められており、その横の空き地に山田長政の霊位がまつられている。巨大な木がまるで墓の代わりになっており、その前に塔婆と花が手向けられている。私たちがやって来るのを見つけて、日本人目当ての売人が、スカートや絵はがきを売るために日本語で話しかけてきた。

すぐ横を流れる河には三艘の舟が岸にもやわれていた。山田長政はここから陸に上がったと伝えられている。黒田住職は、この地に山田長政の供養塔を建てたいのだと語っていた。

私たちの旅は翌日、有名な王宮を訪れ、ワットプラケオ(通称・エメラルド寺院)、ワットポトを参詣して終わった。実質三日間の駆け足旅行だったが、タイ僧伽への興味はさらに強まった。

(三六)



山田長政の供養塔の前で般若心経を唱える方丈と渋井さん

タイ仏教の厚い信仰に 悠久の時の流れを感じて

写真家 駒澤 晃

善光寺の方丈様から、タイ仏教寺院の撮影旅行のお誘いを受けたのは昨年。その頃から上座部仏教の勉強をにわか始めたのだが、何分にも勉強嫌いな私は、結局一日で止めてしまった。それに予備知識は何やら邪魔に思え、その時は「百聞は一見にしかず」が何よりと思つたからだ。

七月の初め、「八月二十二日、タイに出発します。切符も手配しましたので用意して下さい」

と電話を頂き、その翌日は日程表が届いた。内心ちよつと困つた。と言うのは、月刊文藝春秋の特集撮影をかかえていたので、出発前迄に撮影と原稿を終わらせておかねばならない。例えば短期間の外国撮影旅行でも万全の態勢で望むのが私の主義。それに方丈様のご厚意に添わねばならないし、と思うと暦を見ながら四苦八苦した結果無事出発と相成つた。

その頃のタイは雨期の中にあつた。

夜が白白と明け、自分の掌が仄かに見えはじめる、バンコクの街にバアツ(鉢)を抱くようにしたチーオン(黄衣)のピンダバートプラ(托鉢僧)の姿を見かける。それを心持ちにするかのように暗いうちから、板で出来た脚台に沢山のご飯や料理を家の前や店頭に並べている人々。

前日の托鉢風景に魅せられた私は、二日目の朝五時過ぎに宿泊しているホテル横の路地を歩いてみた。華僑の看板の数が目立つ。数人の托鉢僧と行き交う。中国服を着た若い母親と五才位の男児がサイバート(施し)の用意をしている。その前に僧が並ぶ。一人一人の僧にワイ(合掌)をしては鉢に食べ物を差し入れる。格別に量が多いので、

「毎日、こんなに沢山の施しをするのですか」と英語でたどたどしく聞くと、

「今日は主人の命日なのです」と言う。家族の命日や祝日などは特に沢山の施しをして供養

するのだ。

大通りに出てみると、パン屋の前で、二人の女性が交互に施しをしていた。パン屋の主人が手馴れた様子でサンドウィッチを作ってはてきぱきと施主に手渡す。昨夜の雨で路上はまだ濡れているにもかかわらず、その二人の女性は投地礼拝をしている。私はその姿に感動しつつ、写真を撮り続けた。

施主の合掌が終わると、僧は鉢を黄衣で包みこむように抱いて、無言の内、風のように裳裾を翻がえして去って行く。子子孫孫、仏教への厚い信仰に生きてきた人々。それらの光景に私は眩い程の、悠久の時の流れを感じていた。

現在タイには王立寺院と私立寺院合わせて2万の寺があるという。僧侶の数は二十万人。今は安居。一般市民の男性の「一時僧」(タイは男子一生に一度得度して僧の経験をしなければならぬ)とされている)を含めると三十万人の数



になるとのことだ。

国民が改めて、国教である仏教を深く認識する時期でもあらう。

二十三日朝八時、タクシーでホテルを出た。

この時間のバンコクの町は大変な車の数でパクナムまで四十分位かかった。山門前には施しの果物などを売る店が六店出ていた。

黄衣に身を包まれた渋井修さんと白衣姿の山本浄月さんが待っていて下さった。早速、副住職の河北師に紹介された後、共にここワット・パクナム寺院の御住職にお会いした。温顔な方で初対面ながらとても親しみが湧く。

方丈様がご紹介下さった後、御住職が黄衣を差し出され、私に下さった。有りがたく戴いた黄衣は私の手にずしりと重く感じられ、タイ寺院での喜びと感動の「一佛一会」に感謝していた。(御住職からの黄衣の件は、方丈様のご配慮であった)

渋井さんのご案内で寺院を一回りする。晴天の中とても暑い。途中、本堂前で渋井さん呼び止める女性。「サイバート」をしたいと言う。それも渋井さんのことを待たれていたようだ。「渋井さんは人望がありなのだ」と内心同国人として嬉しく思う。

炎天下、施しを受け、投地礼拝、合掌を受けて、経を唱えられる渋井さんの姿を撮影。その渋井さんが眩しく見えたのは、逆光のせいばかりではなかった。

食堂、台所では数十人の白衣を着てハダシの尼僧(メーチャー)が忙しく働いていた。

果物を並べる者、皮をむく者、御飯を炊く者、天プラを揚げる者。そして何もしないで座っている者。

パクナムは典座制度を取り入れており、尼僧がその役割を受けている。朝食の用意は三時

から、昼食は九時から取りかかる。

十一時少し前になると本堂とその囲りに集まった約三百人の僧侶が二百坪程の食堂に入る。一段低い広間には参拝に來た人々が約六十人。住職が釈尊像の横に座って先ず施主に感謝をのべ礼状を渡す。そして僧侶全員による読経があとて食事になる。

参拝者たちは小さな声で話をしたりして僧侶の食事が終わるのを待つ。残った料理をいただくためだ。

途中から合流したタイ在住五十年の小谷亀太郎氏と方丈様、中外日報形山俊彦記者と私は方丈様の施しもあって特別ゲストとして窓側の明るい場所にテーブルと食事が用意され、僧侶と一緒に食べることを許された。

日本の禅寺での食事しか知らない私は、エビ、チキンの揚げ物など豪華な食事にただ驚く。写真撮ることに夢中になって、ほんの少量いた

だいたのみであつたがとてもおいしかった。

尼僧さんは台所で食べていた。そんな姿も自由に撮影させて下さった。

三時ごろシャワーが來た。南国のシャワーは幾度か経験しているがやはり凄い。そのシャワーの中を本堂に走る。三時からの尼僧全員による読経の姿を撮るためだ。慌てた割りには雨のためまだ半数も集まっていなかった。

白衣の尼僧の写真は、光線を上手に利用すると更に清楚で美しい写真が撮れる。『一時尼僧』も十数人見かけた。主婦や学生が一時的に戒律を守り、勉強するために僧院生活に入るといふ。『一時的』であつても百聞は一見にしかずといふことは素晴らしい体験だと思ふ。国教という重みを強く感じた。宗教は真摯でなければならぬ。渋井さんと浄月さんのお話や新聞記事によると南方上座部仏教にも変化の兆しが見えるといふ。まあ内情よりも今の私は、時を惜し

んで目の前の確実なるこの時の姿を追って行きたい。二度とないこの一瞬を……

もう少しゆっくり撮影をしたかったのだが、既に迎えの車が待っていて、我ままは出来ず、心を残しながら早々に切り上げることにした。出来ることならもう一度この地を訪れたい。その時こそは、余裕をもって、余すことなく撮影

をしたいと心で願った。

ホテルに着いた時雨は止んでいた。九階の部屋からバンコクの夕暮れをぼんやりと眺めている。相変わらずチャオプラヤー川を数種類の船が忙しく行き交っているが、チャオプラヤー川は、生じ滅していった数々の歴史の変遷を呑み込んで泰然と流れていた。



「タイふれあいの旅」





▼チェンマイ国立博物館を見学

▼留学僧の渋井修、山本浄月、ワット・パクナム僧達とエメラルド寺院を見学

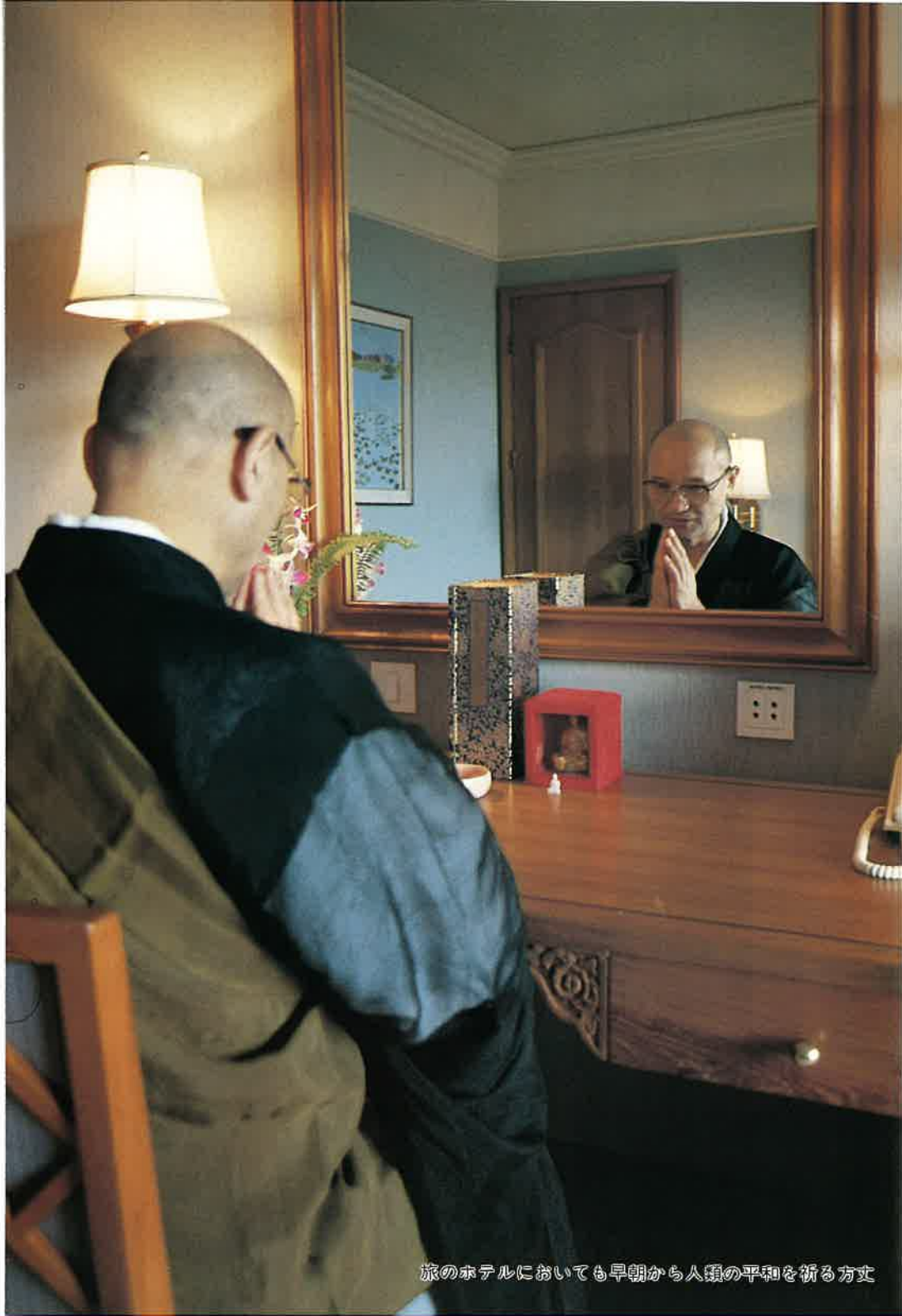




ワット・パクナム御住職から施しへの感謝の言葉を受ける



ワット・ポーの寢釈迦佛足の前で



旅のホテルにおいても早朝から人類の平和を祈る方丈

くらしの中で読む 『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻 その三

成興寺住職 小倉玄照

宏智古仏のことば

大宋慶元府天童山宏智古仏、上堂、示衆に云

く、

「挙す、僧、趙州に問ふ『王索仙陀婆の時如

何。』趙州、曲躬叉手す。雪竇拈じて云く、『塩

を索むれば、馬を奉ず。』師云く、『雪竇は一百

年前の作家、趙州は百二十歳の古仏なり。趙州

も是ならば、雪竇不是ならん。雪竇も是な

らば、趙州不是ならん。しばらく道へ、畢竟如何。』天童、箇の注脚を下すことを免れず。これに差ふこと毫釐なれば、これを失ふこと千里なり。会するもまた草を打ちて蛇を驚かす。会せざるもまた錢を焼きて鬼を引く。荒田揀ばず老俱胝、只今手に信せて拈じ来る底。」

先師古仏上堂のとき、よのつねにいはいく、「宏智古仏」。しかあるを、宏智古仏を古仏と相見せ、ひとり先師古仏のみなり。宏智のとき、徑



山の大慧禪師そうかう宗杲ざんといふあり、南嶽の遠孫えんそんなるべし。大宋一國の天下おもはく、大慧は宏智にひとしかるべし、あまりさへ宏智よりもその人なりとおもへり。このあやまりは、大宋国内の道俗、ともに疎学にして、道眼いまだあきらかならず、知人あきらめなし、知己ちきのちからなきによりてなり。

宏智のあぐるところ、真箇の立志あり。

趙州古仏、「曲躬まげ叉手しやしゆ」の道理を参学すべし。正当しやうたう應時いんもじ、これ「王索仙陀婆」なりやいなや、

「臣奉仙陀婆」なりやいなや。

雪竇の「索塩奉馬」の宗旨を参学すべし。い

はゆる索塩奉馬、ともに王索仙陀婆なり、臣索仙陀婆なり。世尊索仙陀婆、迦葉破顔微笑かせふはがんみせうなり。

初祖索仙陀婆、四子、馬塩水器を奉す。馬塩水

器のすなはち索仙陀婆なるとき、奉馬奉水するくわんれいし。関くわんれいし椀くわんれいし子、学すべし。

〈現代語私訳〉

大宋國は慶元府の天童山の宏智古仏（一一五七寂、寿六七）は、法堂ほつだうに上り、修行者たちに示して云った。

「ここに一つの問題提起をする。ある僧が、趙州に問うて云った。

『王が仙陀婆を索めた時には、どういたしますか』

その時、趙州は、手を身前に組み、ねんごろに身をかかめて頭を下げた。雪竇は、それを評して云った。

『塩を索めているのに、馬をさしあげた』
師は、このことについて言った。

『雪竇は、百年前の大人物、趙州はと云うと、これは百二十歳まで生きた古仏。趙州の態度をよしとするなら雪竇は否定される。雪竇の言をよしとするならば趙州が否定されなければならぬ。さて、これをどう考えるか、いったいどうしたことか。わたしもこれに関して注釈を加え

なければなるまい。しかし、判断をほんのわずかに誤れば、とんでもない結果を招くことになる。なるほどとわかつてみたところてくさむら打って蛇を驚かすだけのこと、またわからぬからとてそれは、紙銭を焼いて死人のおぼけを引き寄せるようなもので、たいしたことはない。わからうがわかるまいがとんとおかまいなしたった俱胝和尚。いつでもどこでもただ指をお立てしていた、そこを学ばねばなるまい。」

今はもうおなくなりになった私の師である如浄古仏は、上堂のとき、しばしば「宏智古仏」と敬慕して仰せになっていた。だがしかし、宏智古仏を古仏として相見えておられたのは、ただひとり先師せんじの如浄古仏だけであった。ところでその宏智の時代、径山きんざんに大慧禪師宗杲そうこうという人がいた。南嶽懷讓（六七七—七四四）の流れを汲む者のようである。大宋国の人々はおおむね大慧は宏智と同程度の人物だろうと考えてい

る。いや、むしろ宏智よりも大人物であると思っているふしもある。このような誤りはなぜ起ったか、それは大宋国の出家も在家も、ともに不勉強で、真実をみる眼に乏しく、人物を見定める力量もなく、自分自身を知る力も充分でないからである。

宏智のことばには、ほんものの心意気がある。趙州古仏がねんごろに身をかかめて頭を下げたことの意味をよくよく学ばなければならぬ。まさにこの時、王が仙陀婆を求めたのかどうか、臣は仙陀婆を奉ったことになるのかどうか。雪竇せつびやうがそれに対して「塩を索めたのに馬を奉った」と評したことの真意をよくよく学ばねばならぬ。いうところの「塩を索めたのに馬を奉った」というのは、ともに王が仙陀婆を索め、臣が仙陀婆を索めたのである。世尊が仙陀婆を索めると迦葉は破顔微笑したのである。初祖達磨大師が仙陀婆を索めるとその四人の弟子は、馬とか

塩とか水とか器とか、それぞれ奉った。馬・塩・水・器のことごとくを索める仙陀婆である時、馬を奉り、水を奉るといふやり方に秘められた急所をよく押さえておかねばならぬ。

塩を索めるに馬を奉ず

ここで宏智古仏と最上級の敬語で称揚されていますのは、宏智正覚（一一五七寂、寿六七）のことです。道元禪師が正師と仰がれる如浄禪師が住された天童山に三十年にわたって住山し、荒廃していた天童山を一一〇〇人の雲水を修行させることの出来る禪寺として整備されました。天童山中興の祖と称せられる方です。

黙々として坐禅する、いわゆる黙照禅をその禅風とされた方で、「只管打坐」（ただただひたすらに坐りぬく）とか、「無所得、無所悟」（さとりなどを問題にしないでただ坐る）とかいう曹洞宗の禅風に大きな影響を与えました。

殆ど同時代に活躍した大慧宗杲（一一〇八九—一一六三）は、公案を工夫することによって次第に悟りの境地を深め、遂には大悟徹底しなればならぬとして、黙照禅を攻撃し、看話禅を鼓吹しました。臨済宗の禅風は、その影響を強く受けているわけです。

道元禪師が、宏智正覚を古仏として称揚されるのに対し、大慧宗杲を厳しく批判されるのは、これは、当然のことと言えます。

ところで、その宏智古仏が問題にした「王索仙陀婆」の話について考えてみましょう。

これは、王が仙陀婆を索めた時に、常にその意に添うような馬・塩・水・器を奉るのが有能な臣とは限らないのではないか、むしろ時によると意図的に王の意に反する馬・塩・水・器を奉る臣の方が忠義な臣である場合もあるのではないか——という問題提起と受けとめられます。

つまり、王の顔色をいつも窺^{うかが}いながら、ひたすら御意^{ごい}に従うべく努^とめていただけでは、臣としての職務は全う出来ないのです。それはそうでしょう。王が、時によると誤った行動に出ようとする場合もあるはずです。そんな時、臣が追従していたのでは大変なことになるます。王の意中^{いぢゆう}にあえて逆らう仙陀婆の選択をし、さりげなく王を諫^{いさ}めることが出来なければ、とても忠臣とは言えません。

しかも、その場合、王の意に反する馬・塩・水・器を奉りながら、王に有無を言わせぬだけの力量を臣が備えていなければなりません。王が腹を立ててしまったのでは、諫言どころの話ではなくなってしまうでしょう。

指示待ち人間は困る

宏智古仏のことばは、世俗の王と臣との関係をととりあげながら、修行上の師と弟子のありよ

うを問題にしています。

「王が仙陀婆を索めた時、いったいどうしま
すか」

という僧の間に、趙州(七七八―八九七)は、最敬礼をしてみせました。これは、ことばによる理づめの解答ではありません。むしろそれを拒否してみせたと云ってよいでしょう。王索仙陀婆の時、臣に問われるものは、その人格・力量なのです。

それを評した雪竇(九八〇―一〇五二)もそのことがいいたいほどにわかっていました。

「塩を索^{もと}めているのに、馬をさしあげた」

と、一見、趙州の態度を批判的に見ているように受けとれますが、実は、そうではなくて、「索塩奉馬」の趙州のやり方こそ師と弟子の関係を正常にするのだと肯定しているのです。

どんなに親密な関係であっても、師と弟子の間には、ある種の緊張関係が必要です。なれあ

いでことが運んでいくようになりますと、双方の横着本性が知らずしらず頭をもたげて安きについてしまうからです。師の指示が明解に過ぎても駄目なようです。弟子は、ただ師の指示に従うのみで、主体性を喪失したいわゆる指示待ち人間になってしまいがちからです。

臣索仙陀婆

このごろの若い保母さんを見ていますと、子供に対してやたらと指示をする傾向があつて気になります。例えば、先日もホールに四、五才児を並べて正座をさせたのですが、担任の若い保母さんは、一人一人の子供に坐る位置をさし、手を子供の肩に置きながらまさに手とり足とりの格好で坐らせています。ああそんな過剰に世話を焼いては駄目だ、一番はしつこの子供の位置だけをだいたい指示したら、少し離れたところから黙ってみていなさい。子供は、ち

やんと適当な間隔をとって座位を決めることが出来るのだから——と私は、その保母さんに申しました。はたせるかな子供たちは、適当にバランスよく自分の位置を決めて坐りました。

まったく放任した状態で、サア、きちんと位置について坐りなさい、と言つても、四、五才の子には出来ません。かと申して、手とり足とりでは話になりません。その辺の消息が指導の勘どころなのです。幼少の頃から、手とり足と



りの指示で育った人が想像以上に多いのでしよう。そういう勲を殆ど持ち合わせていないような若い人がやたらと目について私は気になります。

僧の間に、最敬礼で趙州は答えました。さて、その次に問を發したその僧は、どういう行動をとったのでしょうか。それは、ここには記してありません。しかし、それを考えてみることから私どもの修行が始まるのです。

どんな問を受けても、指一本をおっ立てた俱胝和尚のやり方を奇人扱いにしているはいけななのです。指一本をおっ立てた俱胝和尚のつき放した姿勢にハッと驚き、或いは大いにとまどい、サテどうするか、と自らの行動のありようを真剣に考え抜くときに、自立した人間の生き方が可能になると申してよいでしょう。

今、私は保育園という子育ての最前線に身を置いていますが、保育や教育にたずさわる

人が、既成の概念にふりまわされているのではないかと懸念しきりです。つまり、心理学や教育学やら、子育てに関わる学問の成果（厳密にはその一部をつまみぐいしているだけです）をうのみにし、それを十人十色の子供たちに一律に適用しようとしているのではないかと気になるのです。子供自体が内に秘めている可能性は、無限のはずです。指一本おっ立て、索仙陀婆すれば、子供の側からの奉仙陀婆は、まさに千差万別——既成の心理学や教育学で、その奉仙陀婆のありようを律しきることは出来ないのです。

そういう意味では、子育てに関わっている現代の大人たちは、「王索仙陀婆」に対しては、的確な「臣奉仙陀婆」を要求するのみで「臣索仙陀婆」ということも、きわめて大切な問題なのだということをつっかり忘れてしまっているように思えるのですが、どんなものでしょうか。

インド留学記

その9

水の都

スリナガル(1)



東方学院講師
駒女短大講師
阿部 慈 園

1

プーナの猛暑を避けて、カシュミールの州都スリナガルに遊んだのは、インド留学二度目の夏を迎えた一九七六(昭和五二)年四月のことでした。その年、プーナは三月初頭から暑くなりはじめ、四月二〇日にはすでに日中の最高気温が摂氏四〇度を超えていました。実にわれわれの体温より高いのです。ちよつと外歩きをする

だけで、グッタリしました。暑熱が体力をいぢるしく消耗させるのです。体内の水分を補うために、わたしはふだんよりよけいにお茶(インドティー)やコココーラをのんだものでした。名古屋大学から留学していた日野紹運氏(現在岐阜薬科大学助教授)と二人で、四月二五日プーナを発ち、ボンベイに二泊、デリーに一泊して、スリナガル入りしたのは二八日でした。スリナガル空港は、少しきつい日ざしをほおに感

じましたが、空気は冷たく澄んでいました。桃の花が白く咲きみだれ、チューリップとヒヤシンスが遠来の二人を出迎えてくれました。思わず「北へ来た」ということばが口を出しました。緯度的には、スリナガルと日本とはほぼ同位置にあるのです。

急に肌寒さを覚えたわたしは、バッグからカーディガンを取り出し、身にはおりました。現地の人たちとは見れば、かれらは厚手のウールのスーツとか、手を首だけ出せるポンチョのようなマントを着用していました。

2

カシユミールへは、留学中ぜひとも行きたいとわたしは思っていました。インド人も「一生のうちに一度訪れることが夢だ」といいます。「インドのスイス」などという人もいます。インド人に最も人気の高い映画の一つ「ボビー」

の舞台も、ここカシユミールでした。この映画を留学中たしか三回見たことを記憶しています。

州都スリナガルは「吉祥の町しあわせ」という意味ですが、とりわけ湖と川の多い町でもあります。それゆえ水が豊富で、空気は清く澄み、夕焼けが川面かわもに映えるさまは、乾いていて、生活に厳しいインドをしぼし忘れさせるものがあります。「水の都スリナガル」と呼ばれるゆえんは、そこにあるといえましょう。

われわれは一カ月と少し、スリナガルのダル湖に浮かぶハウスボートに宿泊しました。ハウスボートというのは、ボート(中くらいの船を想像してください)がそのまま宿泊設備をもってあるもので、いわば水の上に浮かぶ家であります。われわれの泊まったボートは一日三食ついて、三〇ルピー(当時のレートで約一〇〇〇円)でした。宿泊費の交渉は、すでにプーナで日野

氏がしてくれました。そのハウスボートの主人は、ヒンドゥー教徒ではなく、回教徒(ムスリム)でした。

3

朝食には、カシュミールパンとオムレツ、それにインドティーが出ました。たまたま、カシュミールティーをオーダーしたこともありましたが。カシュミールティーは、ミルク抜きで、舌にさわやかな味がします。シナモンやカルダモンを入れるとさらにかおりが増します。カシュミールパンは、やや大きめで、平べったい形をし、やわらかくて、当地のハチミツをつけて食べるとさらにうまく感じました。

昼食や夕食は、マトンのカレー煮、ナスの油いため、トマトと赤カブとタマネギのサラダ、キヤベツの水たき、それにライス(恐らくカシュミール産であろう)などが、主なメニューでした。

た。羊の肉のかわりに、鳥肉・卵・魚が出てくることもありました。マトンやチキンには骨がまともについていて、食べ慣れるのに一〇日はかかりました。

4

回教徒は豚肉(ポーク)を食べることはタブーであるが、牛肉(ビーフ)を食べること(ヒンドゥーはタブー)は許されていると聞いていたので、かれらが多く住むスリナガルではビーフが食べられると楽しみにして来たのですが、州政府は牛肉の販売を禁止していると聞き、いささかガツカリしました。政府の役人のほとんどがヒンドゥーですから、かれらの食習慣を住民の八〇パーセントをしめるムスリムにも押しつけているのです。

でも、ハウスボートのおやじは、一日われわれのためにいなかからこっそり手に入れてきて

くれました。調理されたビーフを、われわれは期待をもって口に運びましたが、日本のビーフステーキの味、またボンベイやデリー（プーナでも食べられる）の一流レストランで供される味にはほど遠く、日野氏とわたしは思わず目を合わせたものでした。しかし、イーダブル (eatable) ではありません。

また、わが国にあるのとほとんど同じエンジ色の大豆もあり、これが塩だけで調理されて食卓にまみゆるのには、いささか驚きました。トマトは、スライスして塩をふりかけて食べられるだけでなく、小さくてかわいい完熟トマトは調理用の石でつぶして、コシヨウなどとともに調味料の一つとしても使われていました。

(つづく)



インド留学記

その3

はじめてのインド 国内旅行(1)



愛知学院大学
助 教 授
島 岩

インドに来て三ヶ月が過ぎた。ようやく、英語でのコミュニケーションにもそんなに不自由は感じなくなってきた。また、大学の研究室や寮にも友人ができ、授業やインド的生活にも慣れてきた。だが、それと同時に、ろくすっぽ読めもしないサンスクリット語(梵語)のテキストを、毎日、辞書と首っぴきでながめながら、ため息をつくばかりの生活にも嫌気がさしてきた。「旅に出よう。せっかくインドに来ているのだ。文献研究だけがインド理解の道ではない。イン

ドを見ること。直接体験すること。そのほうがずっと重要なのだ」。そんな気になっていた。ちょうどそのころ、北インドのクルクシェートラで学会があるという情報はいった。研究室の先生がたはみな、学会出席のためにではらい、休講になるというのだ。そこで、私も、学会なるもの見学にでかけることにしたのであった。もちろん、その当時修士課程の私にとつては、学会は、単なる刺身のつまに過ぎなかった。これを機会に西北インドを旅行すること。

それが最大の目的だったのである。そこで、次のような旅行計画をたてた。プーナ発(一九七四年一月二〇日)―ボンベイ―アフメダバード―メッサナージャイプール―デリー―クルクシエートラーデリー―マトウラー―アグラ―サンチー―プーナ着(一九七五年一月八日)。西北インドを半月かけて、行きは、西部鉄道(Western Railway)でボンベイからデリーへと北上し、帰りは、中央鉄道(Central Railway)で南下するという計画である。ただ、なにしろ、はじめてのインド国内旅行、それも一人旅ときているので、ちよつと贅沢に二等車で旅することにした。

インド版お役所的たらいまわし

まず、汽車の切符を、というわけで、プーナ駅にでかけた。日本の感覚で、すぐ、手に入ると思っていた。だが、それが、大きな間違いだった。インドの鉄道は、国有で、駅員もお役人

の一種なのだ、ということを忘れていたのだ。

はじめに、旅客窓口(Passenger Office)へ行く。だが、窓口には、何故か駅員が一人もいない。そこには、客の長い列ができていた。そこで、今度は、案内窓口(Inquiry Office)に行く。すると、切符窓口(Ticket Office)にまわされた。ところが、そこは閉まっている。閉まっている窓口を通して、駅員に尋ねる。「いつ開くんか」と。すると、「今この窓口は閉まっているのだから答えられない。後で聞きに來い」という答えがかえってくる。「後でいつだ」と重ねて聞くと、「今、答えられないと言つたらう。お前、言ったことが分からなかったのか」とおいてなすつた。怒るよりあきれはててしまう。そこで、再度、案内窓口に行つて聞く。「三〇分後です」と答えてくれる。しょうがなく、三〇分後に切符窓口に行く。すると、今度は「二等の切符は隣の窓口です」ときたもんだ。そこで、隣の窓

口に行く、「ここは予約窓口だから、隣の窓口で切符を買ってから来い」と言われる。

「日本でも、お役所のたらいまわしの対応は有名だけれど、インドには負けそうだな」などと、妙な感想をいだきながらも、いいかげん頭に来た。そこで、今度は正当な手続きを踏まずに、トップにアタックするという作戦にでることにした。

駅の事務室に、ズカズカと入り、一番奥の偉そうな顔をしたおっさんのところへ行く。くすると、「外国人留学生用の割引周遊券があるから、地方監督局(Area Superintendance Office)で書類をもらって来るといい」とのこと。そこで、駅の横の地方監督局へ行く。ここで、めてたく私の旅行計画にあわせて周遊券を作ってもらうことになる。だが、ただ切符を買うだけだと思つて、パスポートを持ってきていなかったの、必要書類のサイン作成は明日に延期となる。こ

こまでこぎつけるのに、なんとほぼ丸一日かかってしまったのである。

明日、午前中に、再度、地方監督局に赴き、必要書類にサインを済ませる。すると、今度は「必要な諸手続きをすませておくので、書類は午後にとりに来い」とのこと。午後まで待つて、書類をもらい、今度は、予約窓口(Head Booking Office)へ。すると、案内窓口へ行けと言われる。だが、この二日間で、私のほうも、インド版お役所的たらいまわしへの対応にたいぶ慣れてきていた。そこで、「今、案内窓口でこちらへ行くよう言われて来たのですが」とほげる。すると、ようやく、旅費の計算をやってくれる。そして、最後は、切符窓口だ。ここでやっと、めてたく周遊券を手にかができたのであった。

ところが、まだ、ボンベイ—アフメダバード間の夜行列車の予約が残っていた。ボンベイに

は泊まらないので、プーナで予約する必要があるのだ。案内窓口で正式に尋ねると、「プーナ駅からの予約しかできない。ボンベイからの予約はボンベイでやってくれ」というお答え。しかし、こちらにも、もう、はなから、そんな答えは、信用していない。また、事務室内の偉そうなおっさんのところへ直接でむいて、非公式に予約を頼むことにする。すると、ボンベイ駅に電報を打って予約しておくとのこと（この当時まだ、インドの駅にはコンピューターは導入されていなかった）。ただし、「予約の確認がとれるまで、四日かかるので、四日後にまた来い」と言われる。こちらにも、「四日ということは、すくなくとも、六日はかかるな」と見込んで、六日後に行く。すると、今度は、「出発の前日に来い」と言われる。こんなわけで、周遊券を手に入れ、夜行列車の予約をするだけで、結果的には、なんと十日ほどかかってしまった。

これは、単に、私が、不慣れであったというだけのことではない。友人のシヤランギも、駅へ予約に行き、「朝から夕方までかかってしまった」と、疲れきって帰ってきたことがあった。インド人の場合にも、そうなのである。

その後も、駅やお役所の窓口で、インド版お役所的たらいまわしの被害を受けることになるのだが、これが、その最初の体験である。(一) 非能率、(二) 無責任、(三) 縄張り主義、(四) 下に強く上に弱い、等で悪名高い、インドの官僚下部機構の一端を垣間見た思いであった。

インド汽車の旅

出発の前日、寮の部屋で旅行の準備をしていると、いろんなやつが訪ねてくる。まず、シヴァクマラー(現在プーナ大学助教授)が、デリーのモテイラルバルシダスという本屋への行き方を教えに来る。次に、クルクシェートラ付近



の出身のやつが、デリーからの交通機関の説明に来る。さらに、ラーマシェーシヤが、旅行の準備ができたかどうか見に来てくれる。こんなとき、「頼みもしないのに、なんとみんな面倒見がいいのだろう」と、感謝しつつうんざりし、そしてどこか嬉しい気持ちがある。これが、いわゆる、インディアン・ホスピタリティー(インズの歓待)なのであるか。

朝、一〇時一〇分、所定の時間より三〇分遅れて着いた Secunderabad-Bombay 急行列車が出発する。一等はすべてコンパートメントで、ちやうど、日本の二段ベッド二組みの寝台にドアーがついて、一部屋になったようなものである。とはいっても、昼は、四人が定員というわけでもないように、一部屋に十人程度は押し込まれる。ボンベイ駅(Victoria Terminal Station)には昼すぎに到着。プーナでは結局確認できなかつたボンベイ-アフメダバード間の夜行

列車の予約の確認に奔走する。夕方近くになつて、ようやく確認がとれ、ホツとする。駅の柱に予約者名簿がはりだされたのだ。

安心して、駅の食堂でインド食をとり、二〇時三五分発のアフメダバード行き急行に乗る。四人用のコンパートメントの他の三人は、キリスト教徒の家族三人(両親と娘だ。その娘さんは、野暮ったい娘だが、見送りに来ていた友達がすごい美人。そのうえ、Tシャツにジーンズというモダンないでたちで、田舎町プーナでは、とてもお目にかかれなような代物。「ボンベイは都会だなあ」なんて。あほな感想を抱いてしまふ。

インドの汽車は、二〜三時間の遅れは当然というように、遅れることとて定評があるが、少なくとも、私の経験では、そんなことはなかつた。西部鉄道(Western Railway)を例にとれば、十分と遅れることはなかつた。しかし、中央鉄道

(Central Railway)は、よく、二―三時間遅れる
そうである。その違いは何かと言えば、それは、
走行距離の違いであろう。インドの汽車の場合、
走行距離の長いものは、五日間、延々と走り続
けているものもあるそうで、私の知っている例
でも、中央鉄道を通るジャナタ急行は、デリー
―マドラス間を、延々三日かけて走っている。
これだけ走っていれば、二―三時間の遅れなど
許容範囲だと思ってもいいのではないか。そな
気がしてくるのである。

こんな風に、長い距離を走るものだから、イ
ンドの汽車旅行では、一等の場合には、三食ち
やんと、コンパートメント(車室)までボーイが
注文をとりに来るシステムになっている。それ
以外に、モーニング・ティー(朝のお茶)、イヴ
ニング・ティー(夕方のお茶)も、ちゃんと、列
車の中で取れるようになっていたのである。ま
た、乗り換えて、一晩、駅に泊まらなければな

らないような場合には、各駅に、一等車旅客用
待合室とか休憩室とかがあり、その門番つき
の部屋では、五ルピー(当時一五〇円程度)も払え
ば、とりあえず、盗難の心配なしに(もちろんそ
の門番に荷物の一部を抜き取られることもあり
うるが)、また、荷物の盗難が心配な向きは、駅
の荷物預かりに荷物を預けて(ただし、鍵のかか
らない鞆等の場合には、荷物が抜き取られても
苦情は言わないという一札をとられる)、安心し
て?眠ることができる。

せいぜい、一泊程度の車中泊以上のことは考
えていない日本の鉄道に比べて、インドの鉄道
のほうが、すくなくとも長距離の列車旅行に関
しては、設備が整っているのではないか。これ
が、私のインド汽車の旅の第一印象であった。

ジャイナ教への個人的思い入れ

翌朝六時四五分にアフメダバードに着き、汽

車を乗り換えてメッサナに向かう。メッサナには、ジャイナ教の学僧ジャンブーヴィジャヤ師がいる。この人は、私の先生の北川教授(当時名古屋大学教授)にインド論理学を教えた有名な学僧だ。この人に北川先生からのおみやげ(数珠)を送り届けること。これが今回の訪問の直接の目的だ。だが、私の本当の目的は、別のところにある。ジャイナ教とはいかなるものか、実際に、この目で見てみたいのだ。

私の卒論は、ジャイナ教に関するものであった。ウマースヴァティー(五―六世紀)の名著でジャイナ教の基本的聖典となっている『真理証得経』(Tattvarthahīnastotra)を研究対象としたのだ。まさか、大学院なんぞに行くとは思っていなかったのだ。二ヶ月ででっちあげた卒論だったが、修士でもジャイナ教の研究を続ける気持ちを多少は持っていた。「北川先生と同じように、ジャンブーヴィジャヤ師につき、私は、

ジャイナ教のことをやろう。今回の訪問は、そのための御挨拶なのだ」なんて気持ちもあったのである。

ジャイナ教というのは、インドで仏教とほぼ同時代に起こった宗教である。だが、仏教とジャイナ教は、その後、ある意味では対照的な運命をたどった。すなわち、仏教は、東南アジア、中国、朝鮮、日本、ネパール、チベットとインド国外に伝わり、各地で栄えたが、そのかわり、インド国内では、イスラームの侵入とともに、十三世紀には滅びてしまった。一方、ジャイナ教は、インド国外に伝わることはなかったが、インド国内で存続し、今日でも、商工業者を中心に二六〇万人の信徒を擁しているのである。

このジャイナ教に感心を抱いたのは、この宗教が宗教的自殺としての餓死を認めるという点であった。ジャイナ教の出家僧には、仏教の五戒に似た「五つの大誓戒」(生き物を殺さない・

嘘をつかない・盗まない・セックスしない・なにも所有しない)があり、また、苦行を否定した仏教とは異なり、断食をはじめとする厳しい苦行が奨励されている。この「五つの誓戒」のうち、最も重視されているのが、「生き物を殺さない(不殺生)」という戒であるが、この(不殺生)という思想をつきつめれば、単に、肉や卵を食べないということだけでは終わらないはずである。植物だって生き物なわけだから、これも食べるわけにはいかなくなるはずである。とすれば、何も食わずに餓死することが、最も不殺生を徹底させることにもなりかねない(もちろん、その場合、自分の生命を自ら奪うことも殺生ではないかという矛盾に陥ることにはなるが)。このような(不殺生)思想の徹底と先に述べた断食という苦行が結び付いた結果、断食による死すなわち餓死が、ジャイナ教で、讀えられることとなるのだ。すくなくとも、私は、そう思っ

ていた。

私が、名古屋大学に入学した当時はまだ、全共闘運動が盛んな頃だった。入学後、二ヶ月ほど、大学が封鎖になり、半年ほど授業もなかった。私は、所詮、傍観者にしかすぎなかったが、それでも、この運動の中で提起された「自己否定」という思想は、胸につきささった。また、運動の途中で、精神的におかしくなった友人、あるいは、自殺した友人のことを思うと、「思想に命をかけられるのか」という問いが重くのしかかっていた。そんななかで、「思想的帰結として自己の存在を否定し自覚的に餓死する」というジャイナ教の思想的徹底性にひかれたのであった。とにかく、こんな個人的な思い入れがあつて、卒論では、ジャイナ教を選んだのであった。そして、このジャンプルーヴィジャヤ師との対面が、この個人的思い入れを実際に確かめる機会だったのである。

インド留学記

その7

シク教の祈り



東 方 研 究 会
研 究 嘱 託
保 坂 俊 司

前回御紹介いたしました様に、シク教におい

ては「祈る」ということには幾つかの特別な意味があります。勿論、どの宗教においても「祈り」は重要な宗教行為ですから重視されていることは申すまでもないことです。このことは「祈り」に対して宗教学辞典で「神と人間との内的交通・神との生ける人格的接触をもつこと、あるいは対話をもつことである」と定義していることから御解りでしょう。キリスト教でも「祈りは信仰の最も優れた実行である」として祈り

を重視しています。

確かに「祈り」が重要なのは解るのですが、一体どうして重要なのかということになるとどうもはつきりとしません。その理由の一つに「祈り」が持つ意味の多用性といえますか多義性があるとおもいます。特に、「祈り」には祈る主体者である人間の心の問題も見逃すことが出来なために、その意味が複雑になってしまうようです。しかし、今回は余り難しいことは抜きにして、基本的なことを検討します。

シク教の場合「祈り」を考える時先ず考えなければならぬのが、祈る相手と祈る主体者です。つまり、何に向かつて誰が、何の目的で祈るのかということです。当たり前のことなのですが、それが大きな問題です。というのも、シク教では全く異なった2つの宗教とは深く拘って、その世界観を融合して祈りの世界を造り上げていくからです。この2つの宗教がヒンドゥー教とイスラーム教のことです。

この二つの宗教はどこを執っても全く水と油の関係です。殆ど重なる部分が無いくらい違っています。それは世界観の違いにもはっきり現れています。つまり、ヒンドゥー教は神様が沢山いて、それぞれの機能別に分業しているのですが、イスラーム教の場合は一人ですべてやってしまうのです。いわば官庁組織のヒンドゥー教とワンマン経営者のイスラーム教といった所でしょう。こうなりますと、人間も当然位置付

けが変わってきます。つまり、ヒンドゥー教の様子が沢山いると、人間のほうから神様を選ぶことができる余地が大きくなるのです。それに対してイスラーム教では、そんなことは絶対に不可能です。神は唯一絶対で人間は塵同然の存在です。

こう云ってもなかなか理解出来ないでしょうから一つ例をあげてみます。ヒンドゥー教では呪文が非常に大切です。真言密教などでも良く真言が重視されますが、あの意味不明の言葉のことです。ヒンドゥー教では、神の力がイスラーム教のように強くありませんから、神様も人間の云うことを聞かなければなりません。その命令書の役目を呪文が果たすのです。ですから、神様も呪文を懸けられることを恐れて、にげまどうなどということになります。従って、神と人間の関係はかなり近くて、時には入れ替わることも可能なほどなのです。しかし、イスラーム

ム教の場合は違います。イスラーム教では、神は唯一絶対、全智全能なんでもござれの神様です。ですから、人間の側から神に働き懸けて何か神にしてもらおうなどということは、思いもよりません。人間はただ神の力の前にひれふすばかりです。

以上のような、世界観の違いが、実は「祈り」の形態にも深く影響してきます。というのは、簡単に云いますと「自力の祈り」か「感謝の祈りあるいは他力の祈り」かの差が出てくるからです。日本でも「自力」と「他力」は良く議論されますが、ヒンドゥー教とイスラーム教のそれは、全く日本の比ではないのです。その原因がこの神の性質から導き出されてくるわけです。

難しいことは、後回しにして私の感想を先ず紹介いたします。インドに参りまして、様々な宗教の人々の祈る姿を見ておきますと、その差

というものが祈りの場つまり寺やモスクに現れているように思われます。ヒンドゥー教の寺院は「祈り」の場としては、賑やかで、艶やかで、そして祈りの声もどちらかという騒々しい程です。まさに生きることへのエネルギーの発散の場といっても良いほどに、人間の意志が溢れています。それは神の意向でそうなったというのではなく、人間のギラギラした欲望が剥き出しになつてるといった感じです。神はそこでは丁度陳情を聞く役人のようなものです。時には、今流行の袖の下に目が眩んで…、ということもおこりそうなのです。いずれにしろ、ヒンドゥー教にとって、寺は神を遇す場として無くてはならない、だからこそ、寺は美しく飾らなければならないのです。そして「祈り」も神に氣にいられるように努力せねばなりません。いわば自力の祈りを求められるのです。

ところが、イスラーム教の礼拝所であるモス

クはどうでしょうか。確かにたてものこそ立派ですが、その割には中は全く空同然の簡素さです。極端な言い方をすれば別に建物はいらぬのです。ジュウタン一枚もって歩けばいたる所モスクになるのです。神への祈りの場はどこでもよく、またどんなに簡素でも本質的に神との関係は変わらないからです。なぜなら神は人間の思惑など全く超越してしまっているからです。当然「祈り」も神に感謝する、あるいは神を畏怖する心の現れとして、静かですつましかなものになってきます。さて、この両極端の「祈り」をシク教は、如何結びつけたでしょうか、次回に検討しましょう。



学生寮での生活あれこれ

インド人の家庭で三週間のホームステイを体験した後、学生寮に移ることになった。新学期をとうに過ぎた11月という時期でもあり、寮には空部屋がなかった。ビハール州のパトナから来ていた政治学専攻のラタが、好意でルームメイトとして受け入れてくれた。

広大で緑豊かな大学構内の一角にある女子学生寮は、3mはあろうかという高い壁に囲まれ周囲を圧倒する。正門には、頑丈で大きな鉄の扉で閉ざされ、端の方に開いている潜り戸から



東方研究会専任研究員

清水晶子

出入りする。人の出入りに関するチェックは厳しく、常時門番が詰めている。そして、門番は夜中も寮内を見回り、決して警備を怠らない。来訪者は備え付けのノートに氏名、住所、そして入出の時刻を正確に記帳しなければならぬ。女性は部屋まで自由に出入りできるが、たとえ父親であっても男性は寮の建物内に立入ることは許されない。そういうわけで、男性の来訪者は呼び出し係に頼んで、キャンティーンとよばれる寮内の青空喫茶店で相手を持つことに

なる。面会時間は夕方7時までと決められていた。

とりわけ門限に関しては厳格だった。平日は9時、土曜日は10時、そして月に2回だけ11時まで認められていた。ただ奇妙なことに、前もって届けを出しておけば、相手方のサインだけで外泊はいつでも自由だった。デリー大学のあの場所は、北のオールドデリーに属し、中心街から車でも30分はかかる。厳しい寮の門限もあって、残念ながら留学中には、夕方から催される演奏会や古典舞踊を見る機会はほとんどなかった。二年間とはいっても、①寮監に呼び出されるようなことはなかったものの、がんじがらめの規則の中、「旅行のための長期の外出許可をめぐって寮監ともめることもしばしばだった。今考えてみると、もう二度とインドでは寮生活を送る自信はない。

寮の女子学生達は、暗くなる前に戻り、食事

の内容の貧しさの点以外は、特に不満を感じている様子もなく、まさに「カゴの鳥」のようにみえた。このような制約は外からみると、はじめは非常に理不尽に思える。それは、一般にインド人同士の間で自分の属するコミュニティー（カースト集団）やその成員以外に対しては一定の距離をおいて、お互いに信頼しないことに原因があるように見受けられた。人々はそれぞれのコミュニティーで定められたルールを守っている限りは安泰でいられるし、外の世界は危険と考えている。寮のあの鉄扉がそれを象徴しているように思えた。

一留学生であった私も、N教授が紹介して下さったおかげで、はじめからインド人の家庭で難なく受け入れていただいた。その中で私にもある程度ルールを守ることが要求される。多少の息苦しさを感ずるとしても、ひと度コミュニティーに受け入れてもらえると、全面的に保護

されているという安心感は常にあった。

寮では四棟の建物に三百人ほどの学生達が寝食を共にしていた。寮生の世話をしてくれる使用人の方も大人数だった。インドでは、カースト制によって職業別の仕事分担がはつきり決められている。決して他人の仕事には手を出そうとしない食堂係、門番、洗濯屋、清掃人、などがあって、身の回りのことは全て使用人まかせにできる。

懐かしく思い出すのは、私達の階の清掃全般を受け持ってくれていたフィロージーのことである。彼女は朝食から戻って来るのを見つけると、すぐにやって来てクレゾール液に浸した雑巾で、部屋の石の床を丁寧なふいてくれた。まず気がついたのは、戸口で必ずゴムぞうりを脱いで部屋に入って来ることだった。時たま、砂糖と牛乳をたっぷり入れた紅茶を彼女にもふるまうこともあったが、決して私の部屋では紅

茶を飲むとしなかった。

インドでは、清掃を職業とするカーストは最下層に属し、今でも上位カーストの者が直接そういう人々に触れることはタブーとされ、共食はしない。日常生活の中でも、浄・不浄の觀念が徹底してゆきわたっていて、あたかも人間性まで、それで決められてしまっているかのようだった。このかたくなな「こだわり」は、日本人にとって理解をはるかに越えている。

私が外国人だという気安さもあったのだろう。フィロージーはそうじの後、私の部屋で話をしていくことが多かったが、私のヒンディー語ではだいたいの内容しかつかめなかった。陽気でよく働く、気のいいおばさんだった。彼女は今もあの寮で、黙々と床ふきの仕事をしているのだろうか？もう一度彼女からいろいろな話を聞いてみたい。

オックスフォードだより(2)

愛知学院大学助教授 引田 弘道

長い夏休み

長い夏休みは余程効率よく過ぎないと、全く何をしていたのか分からないまま、ずるずると無為に日が経ってしまいます。休みが終わった後で一体何をしたのか振り返っても、何も具體的な成果がないことがよくあります。

それでも日本の大学は大体二ヶ月間ですの
で、私の場合、一ヶ月間は事務やレジャー等で

消えることを覚悟し、残りの一ヶ月を有効に過ごすことができました。私が勤務している大学の宗教学科共同研究室には広い会議用のテーブルがありますので、誰も来ないのいいことに、毎日わが物顔でそれを専用しておりました。クローラーの利いた中でコーヒーを飲み、誰に気兼ねすることなく煙草をふかしながら贅沢極まりない勉強をしていたわけです。

ところがこちらでは、日本と少し事情が違い

ます。まず夏休みが六月中旬から十月上旬まであり、信じられないくらい長期であります。こちらの大学は一年が三学期に分かれており、秋から新学期が始まるという形になっています。日本の大学だと、四月から始まる学期は前期・後期の二学期に分かれているのが普通です。この三学期はそれぞれに次のような名前がついております。

Michaelmas 学期：10月9日から12月3日まで
Hilary 学期：……1月15日から3月11日まで
Trinity 学期：……4月23日から6月17日まで

期間は一応一九八九年のものですので、年によって少し変動がありますが、おおむね一学期は八週間だと考えればよいでしょう。各学期の間が休みである訳ですが、冬や春の休みに比べて、夏休みが如何に長いか明らかであります。

こんなに長い休みですから、効率よく計画をたてないと毎日が日曜日になってしまいます。それにこちらではクーラーの利いたような部屋はどこにもありません。今年は異常気象でこちらの夏も猛暑であり、日中はあまりの陽射しの強さに外出するのが億劫になるくらいですが、本来は涼しくよく小雨が降るそうです。ですからどこに行っても、デパートでもレストランでも全くクーラーはありません。車にさえクーラーはついていないのです。クーラーもなく、自分専用の部屋も持てない状況では、図書館に通うことだけが唯一残された勉強手段となったのです。ちょうど私の住居から歩いて三十分くらいのところに大学の図書館がありますので、毎朝九時には自宅を出てここで勉強することが日課となりました。



ボドリアン図書館

この図書館は旧館のビルと両脇の Radcliffe Camera、Clarendon (ラドクリフカメラクラレンドン) ビル、それに道向かいの新館を合わせて、Bodleian(ボドリアン)Libraryと呼ばれています。ロンドンの大英図書館の次に大きく、一六〇二年、トーマス・ボドレー卿によって設立されたこの図書館は、五〇〇万冊以上の書籍を持ち、世界でも屈指のものと言えましよう、

これだけ古い図書館ですから、そこには貴重な書籍や写本が無数保管されています。ですから盗難には異常なまでに神経を使います。まず入館用の身分証を持ってないと館内には入れません。カレッジに付属している図書館や、オリエンタル・インスティテュート付属の図書館がオープンであり誰でも閲覧できると対照的で

す。この身分証を取得するには、私が確かにカレッジに所属している研究者であることを証明する Wolfson (ウォルフソン)カレッジの学長 Hoffenberg (フォッヘンバーグ)先生のサイン入りの推薦状が必要でした。こうして手間暇かけて私の顔写真とサイン入りの身分証が出来上がるわけです。しかも、これを取得するさい、この図書館の書籍等を害わず、盗まず、煙草も館内で絶対に吸わない等の次のような宣誓文を声高に読み上げさせられました。

"I hereby undertake not to remove from the Library, or to mark, deface, or injure in any way, any volume, document, or other object belonging to it or in its custody; not to bring into the Library or kindle therein any fire or flame, and not to smoke in the Library; and I promise to obey all the rules of the Library".

このような宣誓文を、仏教の受戒のように、読み上げさせられたわけです。仏教の戒律ではこのように師の前で誓いの表明をすると、戒の本質である「防非止悪」の力が具わるとされていますが、まさに同じ考えがこの図書館にも適用されているのです。

インディアン・インスティテュート

この図書館の新館の最上階には、インド学・仏教学関係の書籍がひとまとめにされているコーナーがあります。ここは特に「Indian Institute (インディアン・インスティテュート)」という名を持つ所で、数多くの貴重な文献が、およそ八万冊以上の開架図書として閲覧に供されています。今まで日本ではなかなか見ることの出来なかった、一八〇〇年代の研究書やインドで出版されたサンسكريットテキストが整然と陳列されており、インド学を研究する者にとって

は誠に極楽のような場所であります。

ここでの本はゆっくりと手にとってながめながら、「これがあの有名な本か」といちいち感心して、二時間ほど経つと図書館の外に出て、近くの King's Arms (キングズ・アームズ) という有名なパブでコーヒーを飲みながら一人悦に入っておりますが、これらの本をよく見てみると、館外借り出しの可能な Indian Institute のスタンプのあるものと、借り出し不可能な Bodleian Library のスタンプのあるものとの二種類に分かれているのです。どうしてこのような区別が同じ図書館の中であるのか、一体インディアン・インスティテュートとはどのような性格のものなのか、探偵になった気分です。あちこちをれとなく尋ねてきました。

運よくこの図書館員であった Jonathan Katz (ジョンナサンキャッツ) 氏の手になる「The Indian Institute, Oxford, and its Bod-

「Jan hosts」というレポートを入手にすることが出来、このインスティテュートの歴史と図書館との関係が明らかになったのです。

このインスティテュートは一八八〇年代の初期、当時オックスフォード大学、サンスクリット学の教授であった。M・モニエル・ウイリアムズ卿によって創立されました。本拠地であるインスティテュートの建物は、図書館、講義室、読書室、インドの美術品とその展示室、さらには談話室までも備えた立派なものでした。図書は主として創立者のM・モニエル・ウイリアムズ卿やS・C・マラン博士の個人的な蔵書の寄贈を核とし、インド本国の研究や個人的資産家からの寄贈により逐次その数を増やしていったようでありました。またカシュミールの王統史を描いた Rajatarangini の校訂者で有名な、A・シュタイン卿がカシュミールで収集したサンスクリット写本のコレクションもまた貴重な

資料となったことは言うまでもありません。

このインドとイギリスの友好のかけ橋として当初絶大な賞賛をもって誕生したこのインスティテュートも、不幸なことに、その当初の目的を十分に達成しないまま、短期間の後にその活動に終わりを告げなければなくなりました。総合的な文化センターの解体は次のような経過で行われました。

- (1) インドの美術品は同じくオックスフォード市内の Ashmolean Museum (アシュモールン) や Pitt Rivers Museum (ピットリヴァーズ) にそれぞれ移管されました。
- (2) サンスクリット学等の講義は大戦後のインド独立、そして大学のオリエンタル学研究所である Oriental Institute (オリエンタルインスティテュート) の設立後には、ここですべて行われるようになりました。
- (3) 図書は、一九二七年にはボドリアン図書館に

所屬していましたが、一九六〇年代までは未だこのビルに所蔵されてはいたものの、その後現在の場所に移管されました。

このように戦後間もなくしてインド独立により、イギリスの植民地支配の終焉と呼応するかの如く、このインスティテュートはその機能を完全に停止したのであります。このインスティテュートがインド本国の資産家からの個人的寄贈を主たる財源として運営されていたのですから、この結末は当然のことであつたのかもしれませんが、学問という名の高潔な存在は、孤高な花ではなく、経済という人間どうしのどろどろとした関係である水面下の泥の中に根を張りながらも、それに汚されることのない美しい蓮華のようなものであることを、今さらながら痛感いたしました。

現在、このインディアン・インスティテュートの建物は創立時と同じ場所である、ボドリア



ン図書館、旧館の Catte Street を隔てた向かいにあります。

図書がすべて移管された後、この建物は大学事務局として使用されておりましたが、一九七〇年代の初めの学生紛争の頃、ここに学生に関する秘密調査が保管されているとして一部の学生に占拠されて以来、ここは大学の現代史部門の研究所及び図書館(Faculty of Modern History and its Library)として使用されています。今ではほとんど誰も気にもとめない、このインディアン・インステイチュートの建物もこのようなインドとイギリスの友好の象徴としての歴史があつたのです。今では、この建物の入口のロビーの壁に掛けられている木枠の銅板に刻み込まれたサンスクリットの文と、その下の小さな真鍮板に刻まれた英訳文にしか、往時の様子を窺い得ることが出来ません。そのサンスクリット語でしたためられた四つの偈文は次の

ような内容となっています。

(1)この建物は東方学を研究するアーリア人(インド人とイギリス人)の便宜に供する為に設立されたこと。

(2)除幕式はインド女帝の皇子 Albert Edward 自身の手により行われたこと。

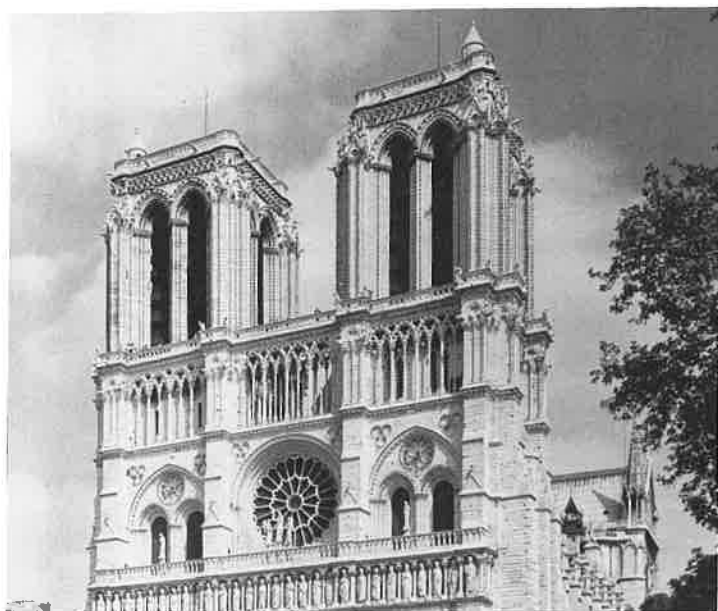
(3)記念碑は西暦一八八三年5月2日の水曜日、インド暦では一九三九年ヴァイシャーク月(10月から11月)の月の欠ける半月の10日の水曜日に据え付けられたこと。

(4)インド学のより一層と発展と、印・英両国の永遠の友好。

このうちで特にインド・イギリス両国民をアーリア人という名のもとに一括して呼んでいることは注目をひきます。インドの古典語であるサンスクリット語、さらには古いヴェーダ語が実は英語、仏語等の現代のヨーロッパ諸語の原型であるラテン語、ギリシャ語と親族関係にあ

ることは、今では周知の事実ですが、このことが発見された当初はヨーロッパ世界の人々には大きな衝撃であったと思われます。植民地を支配する側と支配される側との先祖が実は同じ言語を共有していたわけですから、彼らにとってみれば、やはり、これは目もさめるような出来事であったのでしよう。一方インド国民にとっても、現在は支配階層である肌の白い彼らも起源を遡れば同じ先祖、少なくとも同じ言語を共有していた民族であったという事実は、政治的にはともかく、精神的には彼らと平等であるという自意識を生じさせるのに十分なことであったのです。この精神的・文化的意味での両国民の対等関係が、このアーリア人という言葉のなかに如実に表われていると考えられます。

参考までに、このサンスクリットの原文とその英訳を紹介いたしますが、当時のインド国民のこのインステイチュート創設にかけた情熱を



汲ひし頂けおほき幸ひすべし。

śaleyam prācyā-śāstrāṇām jñānottejāna-
tatparaiḥ,

paropakariḥ, sadbhiḥ sthāpitār-
yopayogini. (1)

ālbar t - e d var d - itikyāto yuvarājo ma-
hāmanāh,

rājaraḥeśvari-putras tat-pratiḥtāḥ vyadhāt
svayam. (2)

ankarāmanka-candre 'bde vaisākhasyāsite
dale,

daśamyām budhavāre ca vāstu-vidhir abhūd
iha. (3)

iśānukampayā nityam ārya-vidyā ma-
hiyatām,

āryāvartāṅgulabhūmyoś ca mitho matri

vivardhatām.(4)

この銅板の下に、真鍮板に次のような英訳が施
せられてゐた。

This building,dedicated to Eastern science,
was founded
for the use of Āryans(Indians & Englishmen)
by excellent
and benevolent men desirous of encouraging
knowledge. (1) *

The High-minded Heir-Apparent,named
Albert Edward,
son of the Empress of India,himself perfor-
med the act of
inauguration. (2) *

The ceremony of laying the memorial stone
took place
on Wednesday, the 10th lunar day of the dark
half of
the month of Vaiśākha, in the Samvat year
1939.
(=Wednesday, May 2, 1883)(3) *

By the favour of God may the learning and
literature
of India be ever held in honour; and the
mutual
friendship of India and England constantly
increase.(4) *

(三十一)



第七回海外留学僧募集について

目的

大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先 世界各地

派遣期間 一年間とするも場合により延長するも可

給 費 派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員 2〜3名

提出書類

- | | |
|-----------|----------------|
| (1) 論文 | (2) 保証人と連署した願書 |
| (3) 卒業証明書 | (4) 履歴書 |
| (5) 推薦書 | (6) 健康診断書 |

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割

● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと

● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

原稿不切 平成二年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

・善光寺だよりの・

留学僧派遣育英会総会

善光寺海外留学派遣育英会(黒田武志理事長、事務局 横浜市港南区日野町一六〇四・善光寺内)の第四回総会が八月二十九日午後二時から、同会事務局のある曹洞宗善光寺の釈迦殿で開かれ、第六回留学僧の募集要項が発表されるとともに、会則及び細則の一部改正について報告された。

はじめに本堂で、黒田理事長の導師により本尊上供を厳修。この日は、夏休み中とあって黒田理事長の長男・武徳君(僧名「大光」、タイ僧名「スツテ・パテイ」、四男・賢志君(僧名「大聖」、タイ僧名「ヤーナ・パツテイ)」も留学僧と一緒に法要に随喜した。

引き続き客殿で、事務局員の桐元大智氏の



司会により総会が開かれた。今回は留学終了者の多くが海外に出ているため、出席者は第二回生の国安大智氏(秋田県)、同じく安井隆同氏(京都市)、第四回生の洪淳海氏(韓国ソウル市)、第五回生の韓京洙氏(東京都)の四人。洪女史は韓国から飛来して参加した。

まず佐藤俊明常務理事が海外留学の意義について話した後、黒田理事長が挨拶し、昨年度の事業報告及び今年度事業計画の発表を行なった。また、平成二年度第六回留学僧の募集、並びに善光寺海外留学僧派遣育英会の会則変更について報告した。

会則の変更は育英会の発展に伴う措置で、これまで理事の選出区分を①仏教界代表②学識経験者③善光寺檀徒総代としていたのに、新しく「④理事長が特に必要と認めるもの」を加え、同時に理事の定数を「六名以上八名以内」から「六名以上十名以内」とした。

また、細則中、これまで海外留学僧の派遣先がタイとアメリカに限定されていたが、要望に応じてすでに他の地域にも派遣している現況に鑑み、新たに「理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関」の一項を加えた。さらに、留学僧の受入先からの要請もあり、また今後の推移を考えて、第十一条として「必要に応じ海外留学僧を講師として受け入れ先に派遣する」との規定を設けた。

これらの変更規則は今年九月一日から施行される。

総会は和やかな雰囲気です時半に終了し、会食後に散会した。

企業研究会で講演

第十回企業研究会が十月十日、大本山総持寺に於いて行われ、「個人再発見―禅に聴く―」をテーマに黒田住職が講演した。斎藤監院老師の

挨拶、そして昼食には精進料理をいただき、日頃体験し得ないことに多くの参加者に喜ばれた。終了後は場所を善光寺に移し、参拝、懇談のうちに散会となった。

留学生を訪ねる

善光寺住職、育英会理事長夫妻は十月十五日より一週間、イギリスはオックスフォード大学の引田弘道師及びロンドン大学留学中の森雅秀氏を訪ね、親しく懇談した。詳細は十四号に報告する予定。

育英会へ土地が寄付される

この度、善光寺総代、育英会理事、防衛大学教授中村治雄氏より、静岡県賀茂郡南伊豆町二条の土地約一千平方メートルを善光寺育英会研修センター建立のため御寄附いただきました。



引田、森両先生と理事長、オックスフォードにて

留学僧六人決まる

善光寺海外留学僧派遣育英会（黒田武志理事長、事務局〓横浜市港南区日野町一六〇四・善光寺内）は第六回留学僧として六人の採用をこのほど決定し、一月二十六日に辞令伝達式を行った。六人は今年四月からスリランカ、アメリカ、タイ、日本へ留学僧として派遣される。同育英会が昭和六十年から採用してきた留学僧はこれで合計二十八人にのぼる。

今回新たに採用された留学僧は、森祖道（曹洞宗）、浅井宜亮（同）、沖田玉映（同）、三宮睦穂（浄土宗）、金秀娥（韓国曹溪宗）、陳永裕（同）、の六氏。派遣先は森氏がスリランカ、浅井、沖田両氏がアメリカ、三宮氏がタイ、金、陳両氏は日本へ留学となっている。

森氏は駒沢大学仏教学部禅学科を卒業し、東京大学大学院修士課程を修了。同博士課程へ進

み、二年間のスリランカ留学を経てイギリスのロンドン大学東洋・アフリカ学院で在外研究に従事。帰国後、東京大学で文学博士の学位を取得し、イギリスのケンブリッジ大学東洋学部で一年間在外研究を行なった。

現在は城西大学経済学部教養課程の教授として東洋哲学を講じ、また東京大学（印度哲学）、愛知学院大学（仏教学）の講師、福井県小浜の曹洞宗発心寺専門僧堂講師、財団法人東方研究会研究員並びに東方学院講師。今回、スリランカ国立ケラニヤ大学のパーリ学仏教学大学院に新設された日本仏教に関する研究教育講座担当の初代客員教授として招聘され、善光寺の育英会に中村元東方学院院长の推薦を得て申請した。

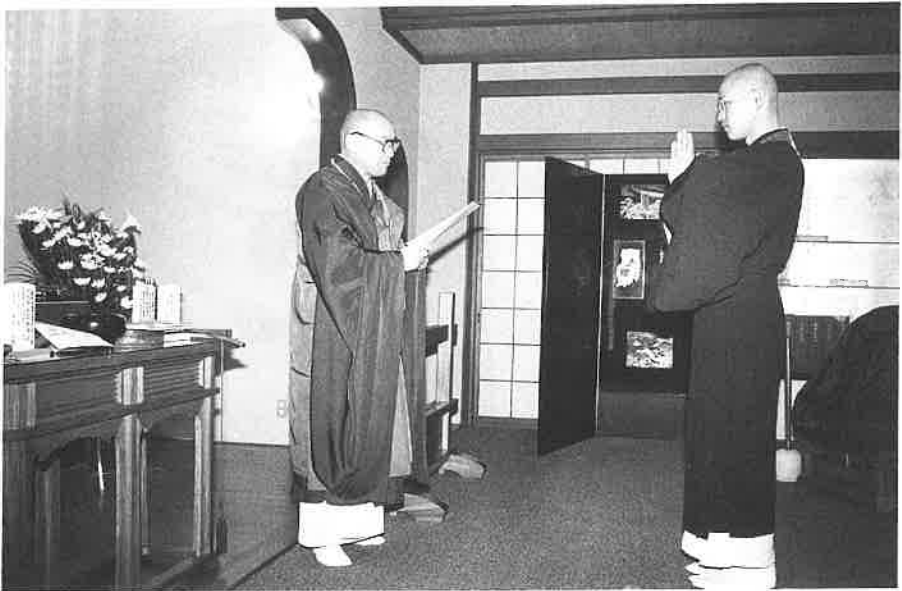
アメリカの禅センターへの派遣が決まった浅井氏は東京大学文学部宗教学・宗教史学科を卒業後、僧洞宗大本山総持寺に安居中の修行僧。東大在学中、十カ月間カナダの大学へ留学した

経験から「禅の国際化」に尽くしたいとの道念を発し、斎藤信義総持寺監院の推薦により応募した。

同じくアメリカの禅センターへ留学する沖田氏は、大正大学仏教学部を卒業し、同大学院文学研究科修士課程を修了後、新潟専門尼僧堂、発心寺専門僧堂で安居修行した曹洞宗の尼僧。推薦者は高野山京都堀川別院の佐々木弘傳主監。

タイ国のワット・パクナムに派遣される三宮氏は大正大学仏教学部浄土学コースを卒業した浄土宗の僧侶で、現在は東京・芝の大本山増上寺の研修生として研鑽を積んでいる。

「現在の僧侶のあり方、寺院のあり方を自問自答してみると、どうしても深く考え直さなければならぬ必要性にかられて」タイ留学を希望した。大正大学の浄土宗学監である真野龍海学長の推薦を得ている。



外国から日本への留学生に対してもこの育英会は門戸を開いており、今回は韓国の曹溪宗から二人が採用された。金秀娥氏は東国大学の仏教大学禅学科を卒業し、現在、東京大学文学部印度哲学科の外国人研究生として在学。とくに如来藏思想の研究を進めている尼僧。同大学の木村清孝教授の推薦を受けた。

また陳永裕氏は東国大学の哲学科を卒業し、韓国水原市の奉寧寺僧伽学院大教科を修了。その後、日本の立正大学大学院に留学し、修士課程を修了。さらに駒沢大学大学院仏教学専攻の博士課程を満期退学し、現在は同大学院人文科学研究科仏教学専攻の研究生として博士論文作成のため就学中。同大学の平井俊栄副学長が推薦人になっている。



三五庵

ご寄付御礼

〈海外留学僧派遣育英会〉

大菊	軍平殿	百万円
中央	典礼殿	四十万円
阿部	慈園殿	三十万円
越石	周平殿	二十万円
一適	隆信殿	十万円
山口	之徳殿	十万円
遠藤	清勇殿	十万円
中村	正信殿	五万円
田野井	富貴子殿	五万円
岡田	哲道殿	五万円
松田	亮三殿	五万円
滝沢	武雄殿	五万円
仲田	清祐殿	五万円
井高	帰山殿	五万円
西海	秀晃殿	三万円
新城	三郎殿	三万円
西村	輝成殿	三万円

井口	義文殿	三万円
小泉	瑛子殿	二万円
西村	房蔵殿	二万円
敦岡	白鳳殿	二万円
藤井	昭雲殿	二万円
久保田	賢一殿	二万円
黒河内	貞子殿	一万円
清水	真一殿	一万円
伊藤	幹雄殿	一万円
池野	清治殿	一万円
櫻井	雄三殿	一万円
佐藤	信幸殿	一万円
国広	敏郎殿	一万円
大島	一男殿	一万円
竜福	寺殿	一万円
島田	喜久子殿	一万円
伊藤	完夫殿	一万円
今泉	源由殿	一万円
川村	紀夫殿	一万円
広野	義成殿	一万円

〈成寿賛助〉

出井	義章殿	一万円
金本	松市殿	五千元
阿部	慈園殿	三万円
円光	寺殿	二万円
宮本	延雄殿	一万円
吉原	木工所殿	一万円
中村	定典殿	一万円
石川	孝禅殿	一万円
細谷	秀樹殿	六千元
松田	憲英殿	五千元
石川	憲昭殿	五千元
滝澤	孝子殿	五千元

「海外留学僧派遣育英会」ならびに「成寿」に、上記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。

● 読者からのお便り

平素は並々ならぬお力添えを頂戴しておりますこと、改めて心より厚くお礼申し上げます。

さて、あるいはお耳に達しているかもしれないが、今月八日に信楽の神崎紫峰先生をお訪ね致しました。先生の個展は三越で四度ばかり拝見致しております、数ある陶芸家の中でもひと際心に残る作家でありましたが、私ごとき貧乏画商にはほど遠いお方と受けとめておりました。

このたび、京、奈良に用事も兼ね四、五日出張、遅い夏休みを愚妻と楽しんでの帰路、急に思い立ちましてお伺いさせて頂きました。ご上人様と紫峰先生のご縁をどこかで見たようにも思いますけれど、ご上人様のご威徳の高さにまたまた感激したものでございます。

黒田上人様が常々言われますように、上人様が世に出られましたこと

は大勢の方々のお力添えによるご恩といつも感謝し、人の縁の尊さについても教えていられますけれど、神崎先生これまた同様にいい方々にめぐり合い成功されましたご恩を、何よりも感謝しておられます。殊に黒田上人のご恩をいろんな紙面で述べられておりますことはあまりにも有名で、ご上人様が単に仏道説法の上だけでなく、日頃よりいろんな方々に身をもつて救いの手を差し伸べられていきます尊さに改めて感動致しました。

六月に先生の館が出来上がり、まだ完成とはいえないそうですが、豪壮な民家づくりの建築は豪放な奇才、紫峰先生にふさわしい立派な物でした。

初対面で不躰な突然の訪問でありましたにもかかわらず大層なおもてなしを受け、ご一同様と心よりの名残を惜しんでおいとま出来ました。

これひとえに神崎先生のお人柄は

もちろん、黒田上人様に日頃よりご愛顧を頂いていますことが何よりの信用となりまして、よも山のお話を存分にお聞きすることが出来ました。ここに謹んで心よりお礼申し上げます。

なお、ご上人様に会ったらくれぐれもよろしく申し伝えてくれとのお言葉でした。

ご報告とお礼がずいぶん遅くなりましたこと何とぞご寛容下さいまして、今後とも末永いお引き立てを賜りますようこの機会を拝借致しましてよろしくお願ひ申し上げます次第です。

横浜 蓮藏栄治雄

先般、育英会の規程、細則の一部変・改正につきご通信を頂き、ご返信もせず失礼しました。

会が発展するにつけて、規則、細則が数々と改正挿入等が必要となつて参ります。

育英会ますますのご発展をお祈り
申し上げます。

兵庫県 永澤寺 渡辺 秀雄

この度成寿十三巻をお贈り頂き、
数回読みましてすっかり感動を致し
ました。

仏祖に仕えられる姿勢はかくある
べきと大いに気を引き締め、是非見
習わねばと、写経に大いに努力を重
ねております。

高僧 名僧に良き因縁を得られて、
今後のご進展いよいよお盛んになら
れることを期待申し上げます。

東京都台東区

綸翠雲堂 会長 山口 之徳

貴師のご活躍ぶり折りつけて拝聞
致し、そのご努力精進に驚き、かつ
尊敬致しております。

観音堂・舍利殿の完成に伴い、思
いもかけず祝金をお送り下されびつ
くりもし恐縮致しております。

落慶は正式にはまだ挙行しておら
ず、八王子市内檀信徒へお披露目の
形で教区寺院内で内輪に営み、もう
少し備わった時点でご本山を含めて
落慶式を行う予定に致しております。
東京都八王子市 信松院 西村 輝成

先日、阿部先生よりのお話でタイ
の旅行にご一緒して頂けることをお
伺い致しました。本當にうれしく存
じます。

私の第一の目的はスコータイのロ
ーンタ祭りでございますが、初めて
のタイの旅ですので、何とぞよろし
くご指導賜りますようお願い申し上
げます。

鎌倉市 石川 響

このたびは御開創二十周年をお迎
えになり、まことにおめでとうござ
います。次々に若い方が海外に雄飛
なさり、またそれらの方々が貴重な
体験や知識を「成寿」において公に

され、我々を裨益して下さることは
有難いことです。御山内の益々の御
隆昌と皆様の御健勝を心より祈念い
たし御礼といたします。

東京都世田谷区 吉津 宜英

「倭成」の本で方丈様と庭野会長
との対談を知り、幾度か登山させて
頂きお会いしている方丈様が載って
いることを知り、とても身近に感じ
活字を追うのも夢中になり拝読させ
ていただきました。多方面にご活躍
のお二人も目的は世界平和であるこ
と又、めざしていらつしやることを
知り感動いたしました。あまり大き
くなく通勤にもっていくのにとても
便利で大変勉強になり主婦の私は唯
一の読書の時間でもございます。い
つも本當にありがとうございます。

大月市 高山さつき

いつもご支援ありがとうございます。
す。

千の大皿鉢も中間点を過ぎ、ガンパッテいます。

おかげさまでいろいろな勉強をさせて頂きました。初めはつまずいていた生地づくりもどうか手慣れて数をやることの必要性がよくわかりました。今までの小物は手のひらで扱えるような気がしてきて、思わぬところまで良い結果が出てきて喜んでいます。

当初、いろいろな千点をつくるつもりでしたが、進めていくうちに、大小の大皿鉢を壁にかけられるようにして数十点を一つの単位にして、それを壁面に見たて、一つのつながった絵を仕上げるという構想を得、その方向で進めています。それぞれの一点は全体の絵の一部ではあるが、それぞれの器にも一つの絵が出来るというわけです。展示の効果とか新しい絵皿の形態としてもおもしろく、器の中に閉じこもる絵でなく、器からはみ出る勢いのある絵としても新

しい可能性が 있습니다。

今はそのそれぞれの絵の構想に時間を使っています。

松の巨木、海と岩、鶴の群舞、竹林、山水、怒涛、風景、雲、柳、文様等、五十点の単位で二十景の絵が出来ます。ちよくちよくスケッチに出かけてそれぞれの構図を考えています。新しい絵をかいてやろうと意気込んでいます。

そんなわけで「行動より学ぶ」という姿勢ですので、細部はどんどん変化していきますが、その辺も含めてよろしく願います。

きょうある所で、「百足死しても倒れず」ということを聞き、とても感動しました。

小さな自分でもその姿勢を支持して支えてくれる人がいれば、それはひとつの力になり得る。

創造に携わる者は限らない自由を得なければならぬという自分の生き方と通じ、どこにも属せず、なお

独自の方法でひとつの力を示したいという陶芸の姿勢にも通じるのです。この会も百人の方の力を借りて成り立っていることもあり、「百足の会」という名前にしようと考えたわけです。

その記念と中間報告のお礼を兼ねて、百点の鉢をつくりました。高台の中にそのことを書きました。お受け取り下さい。

同封の写真は、大皿用として借りている仕事場とその前の景色です。雄大な自然はすばらしいのですが、仕事で苦しんでいるときはとてもきびしく感じます。夜景の写真は普段の仕事場と住居です。家族四人、屋根裏で楽しく暮らしています。

どんなときでも、それを意味のあることとして受け取れる。そんなわけで、楽しく過ごしています。

焼の段階に入るのもう少し先になりますが、その時点でまた報告します。

これからもよろしく願ひします。自由にさせてくれること、とてもありがたく思っています。

それに答える仕事をお見せします。

滋賀県高島郡 梅田 純一

このたびタイ宗教文化学修の旅に先生とご一緒させて頂き、いろいろとご高説を拝聴しましたことありがたくお礼申し上げます。

歩きながら、ときには食事の折などに何気なく交わすお言葉に心暖まるものを感じ、更に立ち居振る舞いの謙虚さを拝し、これは仏法と徳の積み重ねによるものと思ひ心から敬服しております。

私事で恐縮ですが、去る七月に喜寿を迎え、大勢の方々に七十七年間お世話になりきようもまた無事で過ごせますことはありがたいこと、み仏に合掌しております。

しかし日々の生活は喜怒哀楽の波にもまれ、報恩を態度で表すことが

ためらわれる現実で、恥ずかしい次第です。

末尾ながら、ご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

黄金さすタイにはタイの仏の座

むなしさや夏草しげる寺院跡

東京都太田区 太田 好信

過日は南フランス禅堂建立に格別のご援助を賜りありがとうございました。

改めて衷心より感謝申し上げます。善光寺開闢以来、次から次へと大事業を成功させ、更に仏教の国際化時代を先見し独自の留学僧の企画等、その広大な誓願力と豪快な実践力にひたすら感服、驚嘆致しております。

ご繁忙のさなかにもかかわらず、拝問の折にはご歓待して頂き、的確なご意見や卓越したご示唆を拝聴致し恭悦至極に存じております。

衆生済度の海外行脚にお出かけのこと、満願円成をお祈り申し上げ

ます。

山梨県大月市 瑞岳院 森山 大行

成寿(秋季号)を楽しく読ませて頂きました。

特に小倉住職の「王素仙陀婆の卷その二」では考えが整理されました。即ち、禅門の修行の要諦は「勘」を体得することである。勘という「智」は行脚を通じて得る。なぜなら旅先では考え及ばぬことが発生し、それらに対処しなければならぬからである。その対処の過程で智慧を感得する、という内容です。私はその智慧を何のために、どのように生かすべきということにも大変興味を持っています。また一人一人が持っている智慧をいかに結集してことに当たるか、それらをいかに一般化し体系化するかということも、多くの人が共有するために必要と思っています。

東京都千代田区
東洋エンジニアリング(株) 遠藤 宣雄

開創二十周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

この間のご苦勞、ご尽力お察し申し上げます。

ますますのご発展、ご活躍ただただ頭の下がる思いで一杯です。ご先師さまも大寂定中どんなにかお喜びのことと拝察しております。

国際的ばかりか汎宗教的な大活躍の様子、誠に目を見はる思いです。

今後のご健勝と更なるご活躍を祈念申し上げます、お礼とさせていただきます。

東京都世田谷区

耕雲寺 芦辺 謙禪

「成寿」秋季号を楽しく拝読させて頂きました。

海外留学僧派遣育英会に山田天台座主さまが名誉顧問にご就任されたこと、誠におめでとうございます。

人材の育成がいろいろなところで実

りつつあり、黒田住職さまのご努力のたまものと存じます。また入選論文も有意義な論文で、これからはこうして国際的に活躍する人が必要ない時代であると思います。

どうぞ黒田先生のご活躍と育英会のみますますのご発展を祈念します。

東京都新宿区 庭野平和財団

事務局長 山野井克典

祝日にもかかわらず、私共、人材育成研究会にご配慮頂きましてありがとうございます。ありがとうございました。

日本電気は技術中心に発展してきた関係上、発想がどうしても片寄りがちで、教育担当として大いに問題意識を持っております。

先生のお話は、教育担当としてのみならず私自身の振り返りとして有意義な体験でございました。

先生のご活躍を祈念致します。

東京都港区 ㈱日本電気総合経営

研修所 田中 義晴

ご投稿下さい

皆さまからの投稿をお待ちしております。心に残った出来事や随想を、思いのままにお寄せください。巻末のハガキをお使いいただければ幸いです。

善光寺 出版部

TO SEE THE PLEASURE OF BETTER FRUIT

It was just a quarter century ago, 1966, when I put my Buddhist crosier off and found peaceful religious life in Wat Paknam, Thailand, after I had trained myself at the two Honzans (head temples) in Japan and through subsequent pilgrimages to historic Buddhist places in India, in an attempt to "return to Buddha through the founder of the Buddhist Sect".

Wat Paknam is my spiritual home, the origin where I grew up to a Buddhist with eyes open to the world. It was also the original place to receive scholarship priests from Japan. 6 years ago, the Zenkoji Scholarship Society for Priestly Study Abroad took its first step by sending here two Japanese priests for study in this place of the country.

To this important place, therefore, I have visited several times to worship it out of gratitude. The last visit there, last year, was particularly significant. In November last year, I joined the "Religion and Culture Tour in Thailand" sponsored by Toho Gakuin which is directed by Dr. Hajime Nakamura. Naturally, the tour schedule included sightseeing famous temples in Bangkok. But preferring to superficial sightseeing, I proposed visiting Wat Paknam, holding

a food service and taking lunch there. The proposition met general consent of the touring party and was put into effect, to be thanked by both parties. I believe that the deeds might have had some contribution to the understanding of and the promotion of friendship with the southern Buddhism, as well as to the apprehension of the significance of the Society dispatching priests for study abroad.

In Wat Paknam are Phra Bhanawa Kosol Thera, a Japanese assistant chief priest of Thai citizenship, and Mr. Kametaro Kotani, Chairman of the Thai-Japanese Buddhism Promotion Association, whom I am familiar with. As they would offer good opportunities to build up friendship between Japan and Thailand, I shall be happy to be of some service to the promotion of the friendship. At present, the Japanese Association in Thailand and the Japan-Thailand Friendship Association have been carrying out the project of constructing a memorial hall in Ayutthaya to commemorate the acts and achievements of Yamada Nagamasa and other Japanese who lived there in those days. I hope to be of some help to build a tomb of Yamada Nagamasa there.

There is a proverb, saying "Invoke, and flowers will

open". My earnest prayers 25 years ago are now beginning to blossom. To make more flowers open and to see the pleasure of having better fruit out of them, I am determined to exert myself harder. Your encouragement and support will be much appreciated.

編集後記

春の足音が聞こえてまいりました。

皆様お変わりなくお過ごしのこととお慶び申し上げます。平成二年度成寿春季十四号をお送りいたします。

▼今回十四号は開創二十周年記念号として、タイ国を特集いたしました。

八月下旬に写真家駒沢晃先生、中外日報社形山俊彦氏と善光寺住職がワット・パクナムを訪れ、又十一月には「タイ宗教文化の旅」で佐藤俊明老師とロイ・カートン祭の取材にタイ国を訪問しました。ロイ・カートン祭りは、日本では到底見ることでない美しい光景であり、敬虔な姿でありました。その報告を御一読下

さい。

▼「甚妙泰佛国土を歩く」「タイふれあいの旅」とグラビアの特集をくみました。写真は駒沢晃先生です。先生は四十一年二科展に入選し、主な著作に写真集「仏姿写伝―鎌倉」（神奈川新聞社刊）「風車まわれ―水子地藏に祈る」（春秋社刊）などがあります。先生に大変お骨折りいただきあつく御礼申し上げます。

▼善光寺だよりに報告のとおり、第六回育英生が決定いたしました。当選論文は次号に掲載の予定です。

▼「精進を家とし 精進を樂とす 精進の中に安樂を看て 精進を永遠の命とす」という信念の仏師錦戸新親先生との対談を予定しております。先生は善光寺大日如来の制作者

であります。どうぞご期待下さい。

▼一月十一日に善光寺で新年祈禱会が行われました。当日志田房子さんの琉球舞踏が披露され、沖繩の心をひたすらに舞う姿に、出席者の感動を呼びました。

▼次回は韓国仏教の特集号を組む予定です。お楽しみ下さい。

今月は、恒例の春彼岸会が行われます。御先祖様のお参りをいたしましょう。

成寿 第十四号

平成二年三月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五（八四五）一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺